



内科撰要

自
至
十
二

昏睡
不寐
卒厥

卷之四

洋学文庫
文庫 8
C 26
4





內科撰要

胸膈痛
乾嘔吐
酸嘔雜
腹痛
喘急
不食
善饑
吐血
惡心
愛氣

十一
十二



西說內科撰要卷十

晴保氏曰菴堂

遠西

玉函涅斯我爾德兒著

日本

津山 宇田川玄隨 晉 譯

醫官法眼桂川南周國瑞 閱

胸脇痛篇第二十三

胸脇痛コレヲ羅^ラ旬^シニ布^フ樓^ル栗^リ蟄^チ斯^スト謂^フ。凡^ソ胸脇ノ中痛ニ外表ヨリ抵觸スト雖モ自若トシテ其痛コレガ為ニ増スコトヲ為^ス。サ^ルノ証皆是^レシ。胸脇痛ト稱ス。此其布樓栗蟄斯ノ名タル元

ル所ノ病原多端ニシテ一ナ
ラストス。諸其痛ヲ助膜ニ將來リ催スノ景モ彰
著ナル者ハ。即チ翁篤私箋金僞八次ノ第百四十九
ヒニ羅歇章第百四十九第一章ニ載ル哥爾都第百五
論其毒景モ能ク助膜ニ將來ル者ナリ。第三十七
章ニ論スル所ノ酷厲ナル冒寒傷冷毒昂チ聖京
百五十一論ス第四十六章ニ論スル痛風ノ酷厲液昂
伊僞外及ヒ第二十九章ノ失苟兒陪苦第二十一
章壞液ノ酷厲ナル者第百十三章ノ曷郎布的
列金僞等ノ助膜ノ細筋纖維ニ嬰レル者。又ハ其

他ノ因有テ痛ヲ助膜ニ催ス者亦各其証候ヲ具
テ發スルカ故ニ茲ニ因テ以テ諸ノ胸脇痛ヲ區
別シテ各其病原ニ本テ的當ノ治ヲ施スベキナ
リ。其翁篤私箋金僞及ヒ羅斯ノ下。余カ著ス所ノ
瘍科精選ニ之ヲ詳ニス。○夫然リ。故ニ此病ニ於
ル。只其真胸脇痛ト類胸脇痛トノ二証ヲ分ツト
雖モ又其中ニ就テ各証ノ本リ所ヲ區別セサレ
ハ則チ未可ナリ。矧ヤ尋常治術ニ從事スル者ノ
如キ其因ノ區別ヲモ辨セズ。諸冒脇痛ヲ察シテ之
ヲ翁篤私箋金僞ニ混スルニ於テヤ。○今將
ニ次ニ於テ其各異ノ証候ヲ舉テ。彼此ヲシテ相

身體ニ流輸セシムルニ必ス須ツ所ノ肺ノ舒張
ヲ妨奪シテ其官能ヲ遂スルイテ得サラシムル
カ故ニ其脈微弱ニシテ數大ニ懊懐ヲ苦直煩ムル証ア
ルナリ。○其翁篤私參金僞ノ進行クテ四日程ヲ
經テ膿ヲ成ス^一無クハ復タ其吐痰ノ証アラン
一ヲ期望スベカラヌ。其翁篤私參金僞ノ和平ス
ルニ非ルヨリハ其証ヲ得ル^一有サルノ^一。○是
故ニ白痰ヲ吐シ小水ニ白望ヲ見ス^一連ニシテ
其痛ナラヒニ寒熱共ニ減スルノ証ヲ見ス^一。此
種ノ中ニ於テハ甚タ苦澁トスルナリ。然ルニ其
痛ナラヒニ寒熱咳嗽漸クニ増益スルハ將ニ變

シテ箇ノ膿腫ト成ントスト知ルヘシ。若シ其膿
ヲ上ハ吐痰ニ由テ之ヲ發泄シ。下ハ尿中ノ白塗
ト爲テ通利スル^一有ルトキハ則チ斯ニ及ハス。
○右ノ胸脇痛ノ如キ若シ膿腫ヲ成ザレハ則チ
大抵進テ胸内癰ニ變シ行ク者ナリト知ヘシ。^胃
ノ中膿壞スル^一病ナリ。由肺痛及ヒ脇痛ヨ
リシテ變シテ生スル^一。○夫ノ翁篤私參金僞ノ重証ニ
在ル者ナリ。詳ス。○夫ノ翁篤私參金僞ノ重証ニ
東西病考ニ倫ス。○夫ノ翁篤私參金僞ノ重証ニ
於ルカ若キ如シ變シテ右ノ膿証ニ至ルハ尚期
望スル所アリトス。爾ヲ大壞液病ニ變スルカ又
ハ瘰癧火毒^一。原名格胡堽^一。吸胡爾羅旬^一。銷鍊焦^一。
スルノ病。毒ノ最モ厲惡ニ^一。隨處爲ニ銷鍊焦^一。
此暴九者第百十章注ニ出病考ニ出ス。

大抵救ハレサルニ至ルト知ヘシ。○是リ次テ第
一ニ先ツ刺絡シテ瀉血シ。而シテ。諸ノ清涼劑ヲ
用テ大便ヲ下利スヘシ。方ハ第十二章ニ著ス。○
次ニ記スル所ノ方ヲ作テ之ヲ与ヘ服セシムヘ
シ。

真胸脇痛ヲ治スル飲劑方

精大麥 八莖

欬冬 二溢

蒸春花 一溢

甘草根 八莖

水 百二十莖

右件合シテ之ヲ煮。漉過シテ滓ヲ去リ。左ノ品
ヲ加フ。尚一ニシテ。其寒温ヲシテ口ニ適セシメ。一麥酒盃ヲ飲服
スル。一日ニ數回。

從テ外表ヨリシテ施スニ外傳ノ劑ヲ以テスヘ
シ。其方胡麻仁末ヲ取テ水若クハ酥滓ヲ用テ煮
テ。糊ノ如クシテ。琵琶布ヲ造リ。酥滓及ヒ琵琶布。以テ
胸上多ク痛ク覺ルノ處ニ罨貼ス。宜リ屢コレヲ
新ニスヘシ。又ハ另ニ何ニテモ温暖ナル者ヲ抱
テ。右ノ罨劑ノ上ヲ蒸慰シテ。其ツシテ冷サラシ

ムヘシ。妙トス。○斯ノ如クスルトキハ。其証必ス
將ニ消散セシトス。○若シ此ノ胸脇痛ノ雜糞トス
麥金トス屈トスヨリ發スルヤ召シ明察セシイリ要セハ。
此ニ一術アリ。須ク其刺絡シテ深スル所ノ血ヲ
視察スヘシ。上面ニ於テ粘稠ナル薄膜ヲ結フモ
ノハ。翁糞トス私麥金トス屈トスヨリ發スル者ナリ。羅斯若ク
ハ熱毒ヨリスルモノハ。其血上終ニ右ノ如キ薄
膜ヲ得ルナシ。○其刺絡スルノ初次一タヒ深
血スト雖モ尚未タ從テ其証ノ減シ差ルイリ見
ルイ無クハ。尚一二次コレヲ報施スルモ俟可ナ
リトス。

右第百四十八章助膜ノ雜糞トス私麥金トス屈トスヨリ
發スルノ証治ヲ論ス

稀涼酷厲ニシテ熱氣ヲ催スノ毒液。其助膜ニ沉
滯底着シテ侵刺スルトキハ。所在コレカ爲ニ炊
熱ヲ發スルナリ。然レ氏其腫脹寒熱及ヒ咳嗽ノ
三証コレヲ前証ニ比スレハ差少シトス。且其痛
等逸緩シテ固着セズ。彼此互ニ微甚ヲ爲ス。其痛
亦オト雜糞トス私麥金トス屈トスノ如ク緊劇ナルニ非ス。其脈終
尚數駛ナルイハ。則チ數脈ナリト雖レ氏。然レトモ
前証ノ如ク剛實ナルニ非ス。其小便赤ク復タ白
塗ノ在ルアルイ無シ其疾ノ全然ト瘳ルニ至テ

毛終ニ之アルイ無キナリ。刺瀉スル所ノ血稀淡
ニシテ凝ラス。前ニ説ク所ノ如キ上面ノ結膜ア
ルイ無シ。斯ノ如キハ其変シテ膿ニ至ルイ稀ナ
リトス。○前ニ説タル翁篤秘金匱ヨリ發シタ
ル所ノ胸脇痛ト。此ニ舉ル所ノ羅斯ヨリ發シタ
ル所ノ胸脇痛ト。其諸証候本リ殊ニシテ標ヲ同
シ。大抵ハ一樣ニ思ハル者ナリ。○然レ氏此章
ニ論スル所ノ胸脇痛ハ每ニ多ハ人身ヨリ暗ニ
泄蔭スル所ノ蒸發氣ヲ壅過シタルニ出ツ。此其
發泄スヘキノ毒體中ニ鬱シテ肋膜ニ聚ルガ致
ス所ナリ。○此証ニ於テハ瀉血ヲ施スト雖モ効

驗アルイ鮮シ。○宜ク第百四十八章ニ説與セシ
所ノ和胸湯ヲ用ユヘシ利益アリトス但其罨劑
ヲ外傳スルノ舉ニ代ルニ斑發ヲ用テ發疱術ヲ
施シ其稀涼醜屬ノ毒液ヲ外表ニ牽引シテ之ヲ
驅除スヘシ。

右第百四十九章胸脇痛ノ羅斯ニ因ル証治ヲ論ス
前ニ列スル所ノ翁篤秘金匱ヨリ發スル胸脇
痛ト羅斯ヨリ發スル胸脇痛ト此ニ種ニ於テハ
始ニ痛有テ然シテ後寒熱コレニ從フ。然ルニ此
章ニ論スル所ノ一証ニ至テハ此ニ異ナリ。是レ
第百二十九章ニ載ル喉風及ヒ第百三十六章ニ

載ル咳嗽等ニ於テ訖リ所ノ熱毒ナル者此ノ肋
膜ニ底著スルナリ。先ツ寒熱有テ然シテ後痛ヲ
發ス。而シテ其痛必久發熱ノ増減ニ從テ作止ス
ルイヲ為スナリ。○此証ニ於テハ其始ニ於テ速
ニ吐痰ノ証候ヲ現スル者ナリ。○其療法一ニ熱
病ニ於テ從事スベシ其中更ニ加ルニ營求シテ
其ヲシテ吐痰シ易カラシムルノ術ヲ施スイリ
以テスヘシ。昂テ第百四十八章ノ和胸湯ヲ可ナ
リトス。

右第百五十一章胸脇痛熱病ニ因ル証治ヲ論ス
第四十二章章ニ論スル所ノ冒寒傷冷ノ醜厲毒毎

ニ多ク肋膜ニ陷下シテ善ク劇痛ヲ發シ呼吸ヲ
妨害シ咳嗽ヲ發スルイアリ。然氏發熱スルイ有
ルイナシ。若シ偶コレアルモ亦鮮少ニシテ其脉
状並ニ小水コレヲ平常ニ比スルニ甚々差異ナ
シ。此ノ諸証ヲ以テ他ノ因ヨリ發スル者ト之ヲ
分別スベキナリ。○此証ニ臨テハ宜ク外表ヨリ
溫暖劑ヲ用テ胸脇ノ患處ニ傳貼スベシ。即チ年
西刺及尼蒲私膏。今世ノ瘍科常ニ用ル所者局
液ノ凝結粘稠セシヲ解シ。諸患堅硬ヲ散シ。諸
ヨリ生ヌル者ニ施シ。甚々良ナリ。若クハ阿失
格碌西奴謨膏。亦今世常用ニ消散シ。諸凝結粘
相解釋シ。諸堅硬ヲ腫止メ。消散シ。諸凝結粘
及ヒ傷損ヲ治シ。部テ。甚々良ナリ。亦筋骨疼痛ヲ
出ツ。

シ取テ之ニ肉豆蔻膜油医学室函ニ云。膜油甚貴
 テ可ナリ用及ヒ核尔撒謨亭露泥ヲ塗リ施
 〇右ノ類ニ於テ世ニ多ク用テ屢效益ヲ得ル
 所ノ者ハ格密訥膏及蘭葛風氣痛ヲ治シ胃膜
 氣驅風ノ及越列謨尼脂樹用テ膏ト爲シ肩背
 功アリ療ス禰部結力草木畧ニ云。性温。膏ト爲シ。肩背
 シ散シ鬱ヲ開キ創傷ヲ解キ粘稠ヲ稀滌シ膿ヲ熱
 至治スル第一ノ功アリト樟腦是ナリ。而シテ瀉血
 ノ術ニ於テハ用ナシトス。是ヲ以テ此事ニ論ス
 ル所ヲ療法ヲ以テ此記ノ一大貴術トシテ第百
 四十八章ニ載ル所ヲ以テ胸脇痛ニ際用スルノ
 手段ヲハ賊弃シテ取テサルナリ。〇其内服ノ劑

ノ如キハ。宜ク第四十四章ニ載ルノ方ヲ用ヘシ
 〇然氏若シ匙漿ニ造テ之ヲ長服ニ供セシイフ
 要セハ。左ノ方ヲ用ヘシ。
 方

白鬻粟舍利別 十六卷

- 鯨腦 各五分
- 乳香 各五分
- 橙皮油 三滴

右件薬合シテ調勻シ。卵様小匙ヲ用テ。毎二一
 匙ヲ服スル。一日ニ數次。八分ヲ以テ際トス。西
医譜ニ見タリ。

右ニ列スル所ノ諸種ノ外。更ニ第百四十七章ニ
論スル許夕ノ胸脇痛ニ至テハ。其診察療法。彼ニ
援引スル如リ。各種ノ諸因有テ發スルカ故ニ。各
自其本原ニ溯テ斯ニ從事スルイ。亦猶右ニ列擧
シテ說與スルカコトクスベキナリ。

右第百五十一章胸脇痛冒寒傷冷毒ニ因ルノ記治ヲ論ス

肺痛篇第二十四

羅旬ニ稱スル所ノ百里布匿鳥諛泥亜。從來肺ノ
翁篤フシトス私シ多タ金キン僣ギンハ。此ノ百里布匿鳥諛泥亜ノ中ニ附屬
シタル一証ノ名號ノク。衆証ヲ包括シテ允當ナ
ルニ非ス。能ク之ニ允當スルノ病名ヲ求レ氏曾
テ之ヲ定メタル者有イナシ。而シテ今呼フ所ノ
肺痛ノ名タル。前篇ノ胸脇痛ニ次テ。百里布匿鳥
諛泥亜ノ諸証ヲ尽リ該存スルイ有テ。以テ之ヲ
對譯スルニ足レリ。是ヲ以テ今爰ニ改テ之ニ易
ルニ右ノ名ヲ以テスルナリ。臆怪兒蘭陀ノ著述

家ニ於テ。豪モ踏襲スル所アルニ非ルノミ。○此
証ニ於テハカナラズコレニ間歇ナリ秘留セル
壯熱ヲ誘發スルノ有モノナリ。是ヲ以テ辨別ノ
緊要トス何トナレハ。若シ是ナキハ。則チ下篇ニ
論スル所ノ喘急病ニ係ルナリ。○然ルカ故ニ是
ノ肺痛ヲ診ニ知ル所以ノ者ハ。必其間歇ナリ秘留
留セル壯熱ヲ以テシ且ツ其脈大抵濡軟ニシテ
數胸脇痛ノ脈ヨリ弱ナルヲ以テ之ヲ別ツナリ。
以其肺ニ患害アルカ故ニ。肺平全ノ時ノ如リ心
血ヲ十分ニ受テ鼓動シ出スノ能ハサルヲ以テ
動脈ノ大經。隨テ血ヲ塞ルノ満盈ナラヌシテ之

少ナルカ為ニ脈ヲシテ剛實ナラシムルノ能ハ
スシテ是ノ弱脈等ヲ現スルナリ。○其候胸中大
ニ熱シ。懊惱スルノ為シ其呼吸スルノ頻促ニ
シテ短急。十分ニ胸膈ニ届リ達セズシテ。僅ニ止
胸ノ上邊ニ過サルガ如シ。且患人臥スノ能ハズ
シテ強テ倚坐シ。胸中氣息ヲ為スノ筋ヲシテ。礎
過スル所ナカラシメシトシ冀望シテ。意ヲ以テ
營求シ或ハ宣ニ隨テ大息スルノ有リ。或ハ便ヲ
擇テ息セサレ者ニ促タルノ有リ。疾徐緩急唯其
之絶塞塞ナカラシムルノ務トシ。只コレニ頼
テ以テ方ニ繼ニ耐忍スル等ノ証ヲ發ス。此其肺

病テ常ノ如ク十分ニ氣ヲ容納スルイ能ナルガ
致ス所ノ也。○但其痛ハ大抵幸ニ少キ者ナリ。然
レ其懊惱ニ至テハ甚タ大ナリトス。此其肺ニ痛
痒ヲ知覺スルノ神經有イナキカ故ナリ。此事等
六十八章ニ於テモ之ヲ論セリ併考フヘシ。○然
レ其患甚淫シテ胸及ヒ縱膈膜ニ及ブカ。或ハ
胸肋ノ膜ニ蒙被スル下キハ則是ノ記ト雖モ亦
痛アルイヲ致スナリ其時ニ方テハ脊骨ト胸骨
ト彼此互ニ相ヒ旁午聯綴シテ組合タル者ナル
カ故ニ亦共ニ相ヒ牽牽シテ。寧急拘痛ヲ發スル
ナリ。此其彼沙ニ繫屬スル所ノ筋膜等ノ痛ニシ

テ直ニ肺ノ痛ニハアラズ。而シテ共ニ肩胛ノ骨
下ニ於テモ亦能ク痛ヲ覺ルイヲ爲スモノナリ。

右第百五十二章肺痛ノ大較ヲ論ス

諸病ノ熱ヲ誘スルモノ。共ニ能ク肺痛ヲ發スル
イヲ爲ス。昂チ翁蒿松多金偃羅斯及ヒ熱病ノ如
キ。常ニ多ク發スル所ノ處肺ニ於シ。或ハ其毒浸
淫シテ下流スルモノナリ。又等二十五章ニ論ス
ル熱壞液。皆能ク其病原ト爲リ。肺ニ在テハ此ノ
肺痛ヲ發シ。肋膜ニ陷テハ則チ彼ノ胃脘痛ヲ生
スルナリ。○右ノ如ク肺痛ヲ發スル病原ト胸膜
痛ヲ發スル爲因ト。其物相通シテ一ナリト雖モ。

然モ肺ハ痛痒ヲ知愛スルイ至テ少ク或ハ
全ク是アルイ無キカ為ト。諸藏ニ勝レ
テ最モナル機。器ニシテ公行大運ノ一
元動ゾ外ニ別ニ特リ肺自ラ異政ノ
運動有カ為ト其西箇ノ血道氣管
所謂肺系肺管ナル者アルカ為
ト肺系ハ心ニ通ス。心ノ右方ノ血ヲ受テ之
シ心ノ左方ニ送リ。以テ鼓動シテ出テ周
身ヲ循行榮養セシム。肺ニ入リ分レテ多
岐ハ岐ヲ為シテ小胞ヲ成ヌ。以テ外氣ヲ
呼吸ヲ為ス。所ナリ。詳ニ解體ノ諸卷ニ見
タリ。其異ナル官能事權アルカ為トシ以テ其胸臑痛ニ
於テ未タ嘗テ有サル所ノ殊異ナル諸症ヲ發

スルイ有テ此肺痛ニ具リ存スレハ肺脇各部ノ
發患原ヲ同シ地ヲ接シ互ニ相ヒ浸注連及スト
雖モ其証候相混スルイ無ノミ

右第百五十三章肺痛ノ病因ヲ論ス

今陳スル所ノ如ク其援引スルノ諸病各自其証
候ヲ具シテ之ニ副スルニ肺ノ官能運管ヲ為ス
イ平常ニ變異ナルノ微ヲ以テスルカ故ニ是ニ
由テ以テ其肺痛ヲ為スノ諸種何レノ病ヨリシ
テ由第スト云イシヲ分別スルナリ。○大抵肺痛ノ
証タル疼アルイ胸脇痛ニ比スレハ多シトス。此
其肺管ニハ天資固有ノ黏滑液多ク變ニ賦與シ

アルガ故ナリ。是ヲ以テ若シ苛辣酷厲ナル外物
斯ニ浸襲刺戟スルトキハ。輒テ應シテ粘滑液ニ
カ為ニ湧發漲溢シテ其部ニ壅盛スルナリ。然ル
ニ若シ之ヲ吐除サレハ。必ス肺管ノ中ニ沉之。委
積鬱聚スルニ因テ。患人尋テ將ニ氣息ノ通利ヲ
閉塞スル一有ントス。○其咳嗽スル一。大ニ甚々
シテ且ツ極テ苦惱ナリ。然モ苛痛少シ。此其言ヲ
聞テモ。亦以テ領解スル一ヲ為シ易シ。○其面部
眼目腫脹シテ赤キ一。胸脇痛ノ証ニ比スルニ更
ニ多シトス。○此ノ肺痛家毎ニ多ク精神錯乱シ
テ言語謬妄ノ証ヲ發シ。又善リ胸内癰及ヒ瘡瘵

ニ變スル者ナリ。胸内癰ハ。注 肺痛治シテノ後ニ
至テモ。亦右ノ証ヲ發スル一アリ。此其肺ノ受ハ
皆助膜ニ相切着シテ間アラサルガ為ニ。病熱滋
益増盛シテ。遂ニ施^カテ災ヲ茲ニ貽ルナリ。夫ヨリ
災助膜ニ在テ。肺ヲシテ縱ニ舒張シテ以テ呼吸
ヲ為ス一能ハサラシムルヲ以テ。從テ而シテ氣
息ヲ障害シテ促迫ナラシム。此皆肺ニ附屬スル
ノ部分ナルカ故ニ。其患害ノ餘波。終ニ茲ニ及フ
ノ致ス所ノ也。

右第百五十四章。餘義ヲ申明ス。
夫レ肺痛ノ發スル所。其原熱病ニ出ル者ハ。熱病

ノ常証アリ。羅斯ニ出ル者ハ。羅斯ノ常証アリ。翁
萬松多金僞及ヒ熱壞液。亦皆斯ノ如シ。既ニ其各
証ノ發シ見テ。其淵原スル所ヲ知り。又其概有シ
テ肺ノ自己ノ部位ト官能主動トニ變異ヲ現ス
ルト有ニ據テ。以テ其原流標本ヲ明ニシ。甲ハ熱
病ニ發スル肺痛タリ。乙ハ羅斯ニ出ル肺痛タリ
ト云フヲ辨識セハ。須ク第百三十三章咳嗽ノ篇
ナラヒニ第百四十七章胸膈痛ノ篇ニ具載スル
所ノ其原由ヲ治スルノ法方ニ就テ。各種ノ療術
ヲ施スヘキナリ。○今茲ニ於テ特ニ標識スル所
ノ者アリ。右ノ治法中ニ施シ設ル所ノ胸上ニ外

貼スルノ藥是ナリ是ノ方。此肺痛ノ証ニ於テハ。
殊効アルト少シ。只是レ昔輩ノ用テ多ク。驗ヲ奏
シタルノ劑ハ。葶氣シシテ氣息ニ混同シテ入ラ
シムルノ方ナリ。下ノ方百五十七章

右第百五十五章肺痛ノ治法ヲ論ス

喘急篇第二十五

喘息氣急ノ病。羅甸ニ之ヲ。亞^ア斯。但末ト謂フ。其病
タル。肺痛ト甚々相混同ス。此其共ニ呼吸不利ノ
証ヲ發スルヲ以テナリ。然氏肺痛ニハ。逆了過必
又熱有テ是ニ副ス。而シテ此病ニ於テハ。終始是
アルイ無シ異ナリトスルノミ。○夫ノ大ニ身體
ヲ運動スルイアルカ。又ハ發熱ニ因テ血ノ循行
シシテ強急ナラシムルノ類ノ如キ。迺チ勢ノ必
スル所其氣息喘急ニ至ラザルイテ得ヌ是等ノ如
キニ至テ。皆等ニ得テ喘急ノ病トハ為サルナリ。○
既ニ然リ諸般ノ氣息ニ寒難

証ヲ以テ此ノ喘急ノ病ト為スニアラズシテ。只
是レ本篇キトシテ論載スル所ノ者ハ。定テ一種
ナレハ。復其純テ氣息ニ寒難ナルノ他ヲ將來ル
ノ諸因ヲ皆此門ニ属シ來ルイテ為サルナリ。特ニ
其此病ニノミ傍テ發スル諸徵候ノ最モ較著ナ
ル者ヲ擧テ之ヲ示サントス。

右第百五十六章喘急大較ヲ論ス。

夫レ平人ニ於テハ。居^ツ恒ニ肺管ノ中ニ。許多ノ津
液有テ。斯ニ賦在シ斯ニ多利シテ。間断セサル者
ナリ。此何ノ為ニシテ然ルト云ニ。肺管ハ是レ氣
ヲ吐納スルノ要路ニシテ。善ク乾燥スルガ故ニ。

為ニ其浸潤灌溉ヲ主テ廻テ爾リ。誠ニ見ヨ人其
口ノ吸開シテ呼吸スレハ。為間ニシテ遠古喉嚨
必ス為ニ乾燥ス。以テ知ルベキナリ。然シテ其津
液。平人ニ於テハ。聲歎可喝スル毎ニ。濁唾粘痰ノ
常ニ其處ニ在テ。必ス吐出スル所アル者ハ。殆ト
希ナリ。見ツベシ此其疾故アルノ際ニ。冰ルヨリ
ハ其不利スル所ノ機灌溉用ニ適シテ。溢レ不竭
キス。故テ送り新テ迎テ。鬱陳スル所ナリ。旋生ス
レハ旋化シ他ノ諸液ト相和シ。旁通普輸シテ。濡
滯スルイ有サルノ徵ナルイ。夫レ此ノ如クナラ
ハ奚リ凝結ト壅盛トニ暇アラシヤ。○然氏夫ノ

冒寒傷冷ノ人及ヒ高年ノ輩ノ如キニ至テハ。則
チ是ニ異ナリ。必ス濁唾粘痰ノ其處ニ壅盛スル
ノ患アルナリ。此其一ハ病邪ニ因リ。一ハ衰弱ニ
因リ。只ニ肺ヲシテ其官能ヲ障シ若クハ失ハシ
ハルカ為ニ。復タ平常ノ如ク新故相推シテ鬱陳
スル所ナキイ能ハス。是ヲ以テ愈鬱陳シテ愈粘
濁シ又旋生シテ旋化シ旁通滯ナキイ能ハス。是
ヲ以テ隨テ滯積シテ隨テ壅盛ス。高年ノ輩。但ニ
是託多キ所以ノ者ハ。職トシテ是ニ由ルナリ。既
ニ斯ノ如クナルトキハ。漸々ニ滋益スルニ論サ
シ。廻テ肺管中ニ充溢シテ。其小胞ニ及ヒ。遂ニ氣

ヨ容納スルニ地十カヲ使ルニ至ルナリ此端ノ
由テ起ル所以ナリ。茲ニ至テ救フニ多ク寒涼
ト濡濕ノ氣ヲ以テス。○右ノ津液ノ爰ニ分利シ
化通セサル。其生々ノ機ヲ失ヒ。其循環ノ活運ヲ
離テ。獨立廢滯スルカ故ニ。終ニ變壞腐敗ニ至ル
ナリ。○迺チ其肺管中ニ充溢シテ變壞シ。喉頭ノ
内膜ニ届リ逼ルトキハ。其侵刺襲斂スルニ因テ
更ニ咳嗽有テ之ニ副シ。患人多ク痰ヲ吐キ除ク
イアレハ少ク安キイヲ覺フル者ナリ。即チ是ノ
記ヲ名テ濕喘ト曰フ。羅甸ノ亞斯但末蒲密獨謨
是ナリ。○是ノ証其痰ヲ吐池スレハ母ハ甘キ輕

キニ至ルカ故ニ治法一二皆緊シテ只其痰飲ヲ
吐池セシムルヲ主トシテ斯ニ後事ニ砂糖蜂蜜
甘草及ヒ諸般ノ舍利別ヲ因テ与ヘ服セシム殊
ニ思ハス連ニ痰ヲ治スルイヲ務ムト
難ニ終ニ窮止ノ時アルイ患キイリ。此其間折ナ
ク生スルノ津液。又代テ茲ニ聚リ集ルカ故ニ其
原ヲ消除セスシテ。徒ニ其支流ノ之ヲ事トスルヲ
以テ勞シテ切ナキナリ。當ニ切ナキノニ非ス。又
好テ其病原ヲ増スナリ。何トナレハ其葉。肺ノ津
液粘稠スル者ヲシテ稀清ナラシムルノ官能ヲ
阻廢シテ之ヲシテ重シ益シ衰弱ニ至ラシムル

通ノ機舊ニ復シ壅盛ノ災復々新ニ發スル一無
キイシ。此ノ法高年ノ人ニ施シテ。甚々相應スル
イリ得テ。最モ極テ良ナリトス。○是リ以テ右ノ
証ヲ療スルニハ。予必ス後方ヲ用テ之リ主ル。

壯肺利胃丸方

安謨泥^{アモニ}亞吉^{アキ}脂^ニ 二錢

拔^ハ爾^ル撒^サ謨^モ字^ズ露^ル非^ヒ亞^ヤ泥

蘇合香 各五分

橙皮末 適宜

右件藥。合シテ每一錢十五丸ト為シ。半時毎ニ
葡萄酒ヲ用テ一丸ヲ送下ス。○又予茲ニ最モ

勝タル良方ヲ得タリ。其方乳香一味ヲ取テ。諸
シ熾炭ノ上ニ尚ヘ。煙氣ヲシテ盛ニ擧セシメ
就テ之ヲ吸入ス。○若シ其痰粘稠ヌルノ已甚
ナルヲ發泄スルニハ。予上ノ煎法ヲ除テ。右ノ
丸子ノ中ニ酒石鹽少許ヲ加フ。

右第百五十七章喘急ノ肺管 粘痰因ルノ証治ヲ論ス。

若シ乃チ寒液水飲ノ肺管ニ鬱滯スル。其氣ノ窒
納シ來ルノ道路ニ横塞スルヲ以テ。夫ヨリ終ニ
其寒液水飲。肺藏ノ四竟ニ汎濫シ。苟モ之ニ附屬
スル所ノ處。皆浸淫シテ其中ニ滯著スル。イ
シ為シ。肺管ノ外若リハ胸中ノ空隙。或ハ肺ノ機

里尔ノ中ニ充塞スルトキハ肺管其外面ヨリ彼
ニ抑壓逼挾セラレ。其舒張ヲ逞クスルニ地ナキ
ニ至ルナリ。○斯ノ如キニ及テハ。復其飲ヲ發泄
スルナシ。患人胸中重難ニシテ苦満シ。熱アル
ナシ。臥スルニ能ハズシテ強坐倚息シ。或ハ咳
嗽スルナリ。或ハ咳嗽スルナシ。此其水
飲ノ性ノ和柔ナルト悍厲ナルトニ由テ異ナリ。
患人寒濕ノ氣並ニ陰靄露瘴ノ候ニ耐ルナシハ
ス。若シ之ヲ犯シテ寒氣ニ投昇スレハ。則テ寒飲
由テ以テ頭凝ヲ致シ。呼吸ヲシテ窒塞セシメシ
イヲ慮圖スヘキカ如キニ至ル。○其病ヲ爲ス所

ノ後。人ノ見ルナシ能ハザル所ナルヲ以テ考ニ其
証候ヲ記シテ之ヲ示シトス。此証附シテ顔面頰
頰及ヒ胃腸腫脹シテ灰白黯蒼ノ色ヲ見シ。又ハ
全身ニ彌テ寒液ヨリシテ發スル腫脹ノ諸候アリ
ルニ據テ。以テ之ヲ辨知スベキナリ。○此証ニ嬰兒者ハ
病勢緩慢ニシテ速ニ甚キニ至ラス。在冉トシテ
能ク久キニ彌ル者ナリ。然レ稍々ニ增多シテ遂
ニ夫ノ思欲ヲ待ノ運動ヲ以テ之ヲ營救スルニ
非ルヨリハ。呼吸ヲシテ窒塞セサラシムルナシ
ハサレニ至ル。是ニ於テ必ス寢臥スルナシ能ハズ。
曉夕未タ嘗テ睡ヲ交ルナシ得ス。若シ睡ルナシ

ラハ。其睡ルニ乘シテ氣道ノ壅塞ヲ致ス。一有ニ
 イテ恐ル、カ為ナリ。○此ノ証ニ臨テ常トシテ、
 只救シ催睡薬ニ求ル者ナリ。然氏之ヲ與ルイ勿
 レ。若シ其証ヲ辨セズ。妄ニ藥シテ之ヲ與ヘ服セ
 シハ。ルトキハ。則チ終ニ死地ニ輸スト知ヘシ。催
 薬与ベキノ証。及ヒ此ノ章第百五十二。章第百五十九。章第
 アリ。第九。十二。章第百五十二。章第百五十九。章第
 觀シテ自。○予其良法ヲ得ルイアリ。即チ次ニ著
 所ノ方ニ因テ其大便ノ通利ヲシテ程ヨリ違
 泄セシメ置ク是ナリ。何トナレハ。其ヲシテ多ク
 下利セシムルノ。徒ニ懊惱苦煩ヲ益スノニシ
 テ。胸膈ノ水液其大便ノ瀉利ニ通スルノ得テ尽

ヲ滌除スルイテ為シ難クシテ。然メ只是小便ヨ
 リ以テ能ク滲利スヘキカ為ナリ。漢医短氣逆倚
 フト云ヒ。支飲モ其形腫ルハ。カ如キ。之ヲ支飲ト謂
 短氣ニシテ微飲アヲハ。當ニ小便能ハスト云ヒ。
 リ去ルヘシト云カ如キ。昂是証ナリ。

潤腸利膈丸方

安謨泥 亞吉 勝 二錢

乳香

蘇甘謨 扭母 各五分

蔞蘿油 六滴

右件藥合シテ每一錢二十丸ト為シ。毎ニ二丸
 シ服スルイ。日ニ數次。大便順利シテ常ト為ル

シ以テ期トス。

另外ニ又宜リ其証ヲ審ニシテ。其液ヲ清滌シ之。
シ小便ヨリ疏利スヘシ。後方之ヲ主ル。
道寸水利臍散方

琥珀

各一錢五分

蛎蛸石

五分

酒石鹽

六滴

薤蘿油

右件藥合シテ散劑ト為シ之ヲ十分ニテ。其一
分ヲ服スル。日ニ三次。

右第百五十八章喘息寒飲肺若ッハ胸膈ノ窒

間ニ充塞スルニ因ルノ證治ヲ論ス

夫レ心血ヲシテ肺ニ朝宗シテ。以テ通身遍體ニ
周流セシムル。及ヒ呼吸吐納ヲ為シテ。順調ニ
シテ障遏ノ患ナキ所以ノ者ハ。膈ニ心藏ノカト
胸ナラビニ縱膈膜ノ細筋纖維ノ運動トシ得テ
能スル所ニアラス。肺自ラ其細筋纖維ノ運動ヲ
具シ以テ氣息ヲ為シ。以テ心血ヲ鼓索シテ。其ヲ
シテ周流セシムル。致ス。○若シ肺ノ異
政ノ運動衰弱スルトキハ。則チ其氣息ノ吐納ト
心血ノ循環トニ於テ。雷滯不利ノ患アル。致
スナリ。夫レ斯ノ如クナルトキハ其人必ス耐忍

スベカラサル懊惱苦煩ニ羅ル者ナリ。説ハ第六
十九章ニ在リ。勉強シテ其呼吸ヲシテ僅ニ窒塞
セサラシムルニ謂ユル思欲ニ從テ運動ヲ以シ。
只得テ是ニ頼ヨ以テ自ラ救フノミ。○然ルトキ
ハ大甚ニシテ歇止スルイナキ喘急ヲ發シ。少モ
痛ヲ覺ルイ有イナシ之ヲ譬ルニ。外表ニシテ見
ルベキ四支ノ運用麻痺不仁シタルガ其痛痒ヲ
知サルカ如シ。○右ノ証若シ高年ノ輩ニ發シ來
リタルニ於テハ。治ニ於テ期望スル所寡シトス。
然氏只其虛弱ノ人ニ發シ來ルヲハ。其虛弱ヲ治
スル藥方ノ外亦兼テ第百五十七章粘痰ノ治ニ

於テ記載スル所ノ方ヲ用ヒ及ヒ胸部ニ外貼ス
ルノ諸劑ヲ施スヘキナリ。第百五十七
章ニ見タリ。

右第百五十九章喘息肺ノ衰弱ニ因ルノ記治ノ論ス
肺ノ藏タル。彼ガ自己ノ運動有テ他ノ運動ト毫
モ交渉スルイナリ。政ヲ異ニシテ獨立ス。故ニ其
細筋織條ト雖モ亦隨テ獨立孤行ノ曷カ即布ラシ的テ列
金ガ備ナ三ナ章ニ詳ナリ。第百有テ。時ニ其記ヲ發ス。亦
能リ以テ自ラ其肺ノ運當ヲ障礙スルニ足レリ。
迺子是ニ由テ以テ暴喘ヲ發スルイアリ。其記少
モ痰飲ヲ吐スルイナリ。其作止甚々暴卒ナリ故
ニ患人モ亦自ラ其作止ノ候忽タルヲ異ナリト

シ。以為リ是レ肺中ニ粘痰有テ窒塞セルガ。俄頃
ニシテ開達ス。故ニ其解散スルイ。亦速ニシテ。其
發スルニ齋リ頃刻ニシテ差復シ。脱然トシテ故
ノ如ク。氣息ニ障碍アルイ無キイヲ得タリト○
此証ニ於テハ。二般ノ治法ヲ用テ要トス。其一ハ
是レ其發スル所ヲ靜止スルイヲノミ務トシ。其
二ハ是レ其後ヲ承テ再ヒ發スルヲ障碍スルイ
ヲ為スナリ。○其標ノ發患ヲ治スルニハ。次ニ記
スル所ノ方ヲ用ヘシ。甚良ナリ。

方
蔞蘿水 四十錢

急製礮砂精

琥珀 各一錢

白嬰粟舍利別 各一錢

右件藥。合シテ調勻シ。小半時毎ニ一匙ヲ服ス。
其記靜止シテ呼吸故ニ復スルヲ度トシテ止
ム。○右ノ方ニテ苟モ曷カ郎布ラ的テ列キ金キ偏ガ。緩解
スルトキハ。復々其痰飲ヲ發泄セシムルイヨ營
求スルイヲ須タサルナリ。○蔞蘿水若シ偶カ置マ缺
スルニ值ハ。直リ大麥水ヲ用テ之ニ加ルニ
蔞蘿油一滴ヨリ四滴ニ至ルマテヲ以テスベ
シ。

余此記ノ刺絡ヲ施スニ因テ即時ニ差快シテ安
帖スルニ至ルヲ見ルイアリ。又其人シバク此証
ヲ發スル毎ニ只刺絡シテ瀉血スルニ頼テ常ニ
治スルイアルヲ見ルイアリ。然レ余茲ニ考ル所
有テ二ノ者皆其情ヲ得タリ。其發スル毎ニ刺絡
ニ因テ治スル者ハ此其瀉血スルニ因テ却テ其
屢發スルノ有リ資ルナリ。是ヲ以テ斯ノ如キ者
ハ其再發スルイ漸々ニ暴卒ニ至ルナリ而シテ
瀉血ニ因テ輕安ニ至ル者モ亦是レ其時ヲ治テ
ハ第百五十八章ニ論スル所ノ粘痰ニ属スル喘
急病ニ陷ル者ナリ。此其肺ノ細助纖條ニ備ル而

ノ運動損傷スルニ因テナリ。○是故ニ余ハ則チ此
記ニ臨ムノ時急迫緊要ノ際ニ此ルヨリハ瀉血
ノ法ヲ用ルイ極テコレ無シ。又其際ト雖モ一次
之ヲ施スニ過カ。只其記ヲ詳察シテ。神經ヲ強壯
ニスルノ劑ヲ用テ之ヲ治スルノ方。

強神丸方

拔^ル尔^サ撒^モ謨^ゴ格^ゴ海^ハ霍^ハ
拔^ル尔^サ撒^モ謨^ゴ索^ベ露^ル非^ヒ亞^ヤ泥^ニ
三錢 令得宜 五分

蘇合香 一錢

安息香 升煉

琥珀鹽 各六分 錢之一

右件藥合シテ每一錢二十九ト為シ。一丸ヲ服
スルイ日ニ數次。

右第一百六十章端息曷郎布列金偈ニ因ルノ証治
ヲ論ス

諸液ノ熟成セズシテ稀涼ナルト。又其匱乏虛缺
セルト。互ニ相ヒ乘スルトキハ。甚々容易ニ堵徑
織細ナル管中ヲ縱ニ旁通浸淫スルイヲ得ル者
ナリ。其通スルイ藏府脈絡始成スル所ノ形質ニ
就テ之ヲ言ニ。常ニ其施設廣大ナル所。又ハ其
備豫周密ナラザルノ部ニ於シ。又其互ニ相ヒ結
會スルイ甚多キノ處ニ在リ。是ヲ以テ第十七章

ニ載ル所ノ翁傑達安の意度ノ証。或ハ水液充盈
セル身體ニ於テ。偶ルトシテ僅ニ一タヒ非常ノ
動作ヲ取ルイ有レハ。早不早其呼吸急促不利ナ
ルノ患ヲ發スル者ナリ。此証世ニ皆以テ喘急門
ニ收ルイヲ為セリ。○如シ其外証ニ翁傑達安の
意度或ハ體中ニ水液夥多ナルノ徵有テ。然シテ
患人除非食後若クハ強ク動作シテノ後。コノ喘
急ヲ發スルニ値ハ。須ク知ルヘシ這般ノ一種
ハ。前ノ諸証ノ如ク利隔ノ劑ノ能ク治スル所ニ
非ス。只胃ノ化熟ヲ扶ケ。或ハ翁傑達安の意度ヲ
治シ。若クハ其水液ヲ清滌シテ之ヲ驅除スルノ

華方ヲ用テ。斯ニ從事スヘキイヲ。○
ニ於ル。毎ニ多ク吐利及ヒ健胃ノ劑ヲ
治スルニ。輒ナ效ヲ奏ス。然レ右ノ
ノ治スルヲ見シ。自餘ノ諸証ニ臨テ
據テ之ヲ治セシイリ擬スベカラス。
ヲ識別シテ。各自ノ療法ヲ分施スベキナリ

右第百六十一章喘息血稀涼不熟及其
多キニ因ノ証治ヲ論ス

凡ソ血ニ於テハ自己ニテ循環流
ヲ稟得タル者ニアラス。只是レ體中ノ諸
諸管ノ官能至切ニ依テ。推盪轉移セテレテ。乃テ

循環流行シテ人身ヲ灌溉榮養スルイヲ得ルナ
リ。若シ其血滋益シテ過多ニ至ルトキハ。則テ右
ノ諸器諸管其功力以テ之ニ應シテ速ニ分外ニ
推盪轉移シテ。滿盈ヲ疏滌スルイ能ハス。○若シ
夫レ其災肺ニ及フ。或ハ血ノ身體ニ充溢滿盈
シテ茲ニ汎濫スルニ發スルカ。或ハ又更ニ強盛
大息ニシテ心肺ニ衝逆スルカ。此ニ一モ有レハ。
應ニ知ベシ其肺謂ユル鬼欲ニ隨フノ運動上諸篇ニ
現タ羽翼ニ扶テ以テ尽ク其血ヲ導達シ其ヲ
テ愈益充積シテ其氣息緊窄ヲ致ス。一無テシハ
ルニ非レハ。自若トシテ舊ニ依テ存スルイ能ハ

ナルイリ。○起居安逸ニシテ動作ニ習ハス。居常ニ豪食大飲スルノ人。其諸部ノ血脉茲ニハ血脉タル者ヲ云。昂ナ。漢人ノ呼フ起脹貴腫シ。或ハ平所ノ青脉青筋ナル者。是ナリ。起脹貴腫シ。或ハ平日血若クハ便血等常トシテ漏泄スル所有ルガ。今テニシテ新ニ止絶セタルノ後ニ方テ。此証ヲ得ルニ値ハ。須ク辨知スルハシ。是レ血ノ過多ニ屬スルイリ。斯ノ証ニ至テハ。法当ニ刺絡スベシ。如トス其証速ニ差テ再ニ施術スルイリ。須ザル者ナリ。○然レ若シ其身體益熱シ。及ヒ其脉号ノ鼓躍動策スルノ証ヲ見アラウサハ。此其喘息氣急。常ニ血ノ過溢ニ出ルノミニアラス。多ク其血ノ騷擾

シテ妄行スルニ得タリ。此証ニ於ル。宜リ先ツ仍テ瀉血ヲ行ヒ。從テ之ニ副スルニ第二章ニ著ス所ノ清涼劑ヲ以テシテ。之ヲ治スベシ。利胸諸方ノ主ル所ニ似タリト雖モ。然レ只其過度ノ騷擾止行リ順調スベキノミ。

右第百六十二章喘息ノ寧過溢妄行箇ノ証治ヲ論ス

西說内科撰要卷十一

遠西

玉函涅斯我爾德記著

日本

津山 宇田川玄隨晉譯

醫官法眼桂川甫周國瑞閱

病屬腹肚

嘔血篇第二十六

羅旬ノ忽密都私告律馬都斯ハ此ニ呼フ所ノ嘔
血ナリ其証第百四十三章ニ論スル吐血肺ヨリ
スル者ト口ヨリシテ嘔吐呵出スルハ同ク一

百十三章

戟スルノ因ヲ貽シ。其血^ニ瘀シテ胃中ニ留滯スレ
ルヲ云。ナ又且ツ其滯ノ藥液胃中ニ停滯スル
所ノ血ト相ヒ混淆スレハ愈益凝位頑固ニ至テ
復々之ヲ湧發滌除スルニ難キガ爲ナリ。然シテ
自後再ヒ又相續テ發シ來ルノ原由ト爲ルト知
ヘシ。且ツ其藥破綻拆裂ノ小管ニ達シテ。之ヲ癒
ス^イ能ハザル者ナリ。○只直リ胃中ヲ滌除淨刷
スルニ。一二ノ緩系和濡ノ諸液タトヘハ水漿乳
酪ノ如キヲ以テ之ニ飲シメ。其ヲシテ吐シ易カ
ラシム。以テ其刺織ヲ弛發スル^テ。痛除リク^ヲ以テ
期トシテ止ヘシ。○自後尋テ緩系ナル惟睡藥ヲ

取テ。毎ニ少許ヲ服セシメ。以テ其運動ノ勢カニ乘
シテ増進スルヲ鎮定スヘシ。昂テ白蠶西果ノ舍利
別。和調スルニ水少許ヲ以ス。○是ニ於テ極テ戒
慎シ。患者ヲシテ諸ノ食饌ヲ禁止セシメ。只直リ
汁液ヲ用テ將息調理スルニ漸リ以テ。破綻ニ
タル小管ヲシテ。稍々ニ自ラ完収セシムベキナ
リ。○右ノ如クスルトキハ。其破綻ニタル胃ノ小
管。自己ヨリシテ完収封合スルニ至ル^テ。譬ハ猶
産後子宮^{キウ}ノ拆裂セルヲ淨刷シテ。諸ノ小管害。自
ラ収合シテ故ニ復スルガコト也。○若シ胃ノ部
位ニ當テ鼓動シ。又ハ大ニ熱スルニ値ハ。當ニ

曉知スヘシ是レ其處鬱塞積結スルヲ。大甚ナル
イヨ即チ宜リ玫瑰花少許ヲ以テ大麥水ニ浸シ
之ニ撒サ兒布ル尔子湿ル而刺及ヒ白蠶粟ノ舍利別出計
ヨ加テ。調ニ與フヘシ。○然シテ後刺絡ニテ瀉血
スルヲ要トス。其鬱塞積結。是ニ由テ以テ成差ス
ルイヨ得ルナリ。

右第百六十四章吐血血管破綻ニ因ルノ証論ス。
其吐血先時會カ經ラ酷烈ナル藥劑ヲ服セルヲ無キ
ニ發シテ痛アルヲ無ク。只其最較著ナルハ常ニ
患ル所ノ痔ノ出血ヲ止斷ス。或ハ又月經通。絶
止シタル後。先ツ患心及ヒ懊惱ヲ催シテ。然テ

テ後尋テ此証ヲ發スル者アリ。當ニ察スベシ是
レ胃ニ蔓延スル所ノ門脈ノ一二ノ支別ヨリシ
テ。其血ヲ瀉出スト云イヨ。其然ル所以ノ理甚々
知リ易シ。此其門脈ノ管中ニ於テハ。膜辦アルヲ
無カ爲ナリ。故ニ該ニ水液ヲ以テ。門脈管中ニ注
シ入ル。トキハ。輒チ容易ニ胃中ノ空虚ニ達ス
ルナリ。解體術ニ於テ。經脈諸管ノ源委所由等ヲ
ル。故ニ盤ニ盤大小刀。布ニ里ハ母ス諸管。蠟燭。針。絲。剪。刀。水鏡。
松ニ疎ス斯。推。鑿。鉤。是ヲ解體必用ノ十三器トス。新昏
載ニ譯ス○其叱スル所ノ血。其色大抵甚黯黯ニシテ
濃稠ナルヲ甚々少ナリ。此其門脈中ニ在ル所ノ
血ハ。爾ヲ稀淡ニシテ濃稠ナルヲナク。那ノ動血ハ

二脈ノ色状ニ同シカテザルガ為ナリ。是以テ其
色斯ノ如ク黯黯ナリ。○言這般ノ吐血ニ至テハ頓
ニ微ク収斂封合ノ藥液ヲ用ルヲ宜トス。昂子第
百四十六章ニ於テ吐血ニ投スル所ノ方ヲ以テ
稍々ニ與フベシ。其胃中ヲシテ閑虚ナラシメ
テテ厚ス。然氏甚タ飢シムベカラス。其苟モ^{ツラフク}枵シ
已スニ取ルヲ妙トス。戒テ諸堅硬ノ物ナラヒニ
咳劇酷烈ノ藥劑ヲ禁止セシメ。只是ノ散末及ヒ
昆^ニ設^ル拂^フ第^{三十五}章^類三^回シ。苟モ胃ニ抵觸刺戟スル
ヲ發スル^一無ラシムルニ在リ。○刺絡ノ術ノ如
キ。前章ノ証ニハ切アリト雖モ此証ニ於テハ用

ナシ。此其瀉血ノ法。以テ門脈ノ血ヲ減スル^一能ハ
ナルガ為ナリ。
右第百六十五章吐血門脈ノ血道暖^ニ兆シテ。胃中
ニ漏洩スルニ因ルノ証治ヲ論ス。

惡心乾嘔篇第二十七

羅^ラ旬^セニ所謂^セル腴^ア設^ハ。此^ニ翻^シテ惡心乾嘔ト
為ス。原ルニ夫レ平人其胃ニ於テ終^ツ古^ニ斷^ス歇^ス
ルノ間ナク。蝸^ト蝸^トシテ輾^ス動^スルノ運動アリ。此
何ノ故ニシテ然ルト云ニ。其飲食セシ所ノモノ
ヲ受テ之ヲ推^シ盪^シ轉^シ輸^シテ以テ化^シ熟^シ消^シ磨^スルカ
為ニシテ爾リ。即テ食道ヨリ始テ漸^リ以テ下行
シ。胃ノ下口薄^ク腸ノ始ル所ニ至ルナリ。其運行ノ
輾^ス動^スル^レ。外表ヨリ切^リ摩^リ診^ス察^スルノ能^ク得^ル
所ニ非ス。亦心意モテ想像内^ニ觀^スルノ能^ク知^ル
ベキ者ニ非ス。亦其輾^ス動^スリシテ之ヲ其常然ノ外

ニ遲^ク速^ク進^ム退^ムアラシムル^レ能^ハス。○然^レ氏^若シ其
運動常ニ反シタル循^行ヲ為ストキハ上ヨリ下
ニ向テ推^シ盪^シ轉^シ輸^スル^レヲ為スベキニ却テ下ヨ
リ上ニ向テ湧^キ發^シ沸^キ騰^スセシムル^レヲ為スナリ。是
ニ於テ心胸^ニ厭^ヒ惡^ムベキノ意思感^觸ヲ催^ステ
ヲ覺^フ。之ヲ惡心ト謂^フナリ。○若シ右ノ惡心ヲ
催^スル^レニナラズ。又是ニ由テ其食ヲ欲^スル^レノ意
思ヲ尽^リ妨^シ棄^シ失^フテ^テ為^スコノ訖^ニ至^テハ則
テ是ヲ羅^ラ旬^トニ發^ス其^ス軟^ク濡^ク護^ト名^ク。廻^テ食^ニ見^テ
嘔^シテ食スル^レ能^ハハサルノ謂^ナリ。其胃中ニ在
ル所ノ者ヲ吐^キ除^クシ^テ為^スニシテ然ル^レアリ又必

シテ然ルガ為ニアラサルイアリ。

右第百六十六章惡心乾嘔ノ大較ヲ論ス

其胃ニ於テ常ニ反シタル運動ヲ發起スルイ。其由來スル所ノ病原多カラズトセズ。其中ニ就テ外ヨリシテ來ル者ハ較以テ察シ易シトス。然レ若シ内因ニテ然ル者ニ至テハ之ヲ能ク明ニシ難シトス。其証ヲ發スルニ値ハ。隨テ即チ其治ヲ擬議スルイ。宣リ的實ニ從事セシテ其望スベキナリ。○然レ之ヲ的實ニスルイ固ヨリ易カラス是ヲ以テ病ニ切當セザル効驗ナキ方法ヲ高議考按スルイ常々ニシテ數コレアリ然シテ其

方亦編的ニ効ヲ彼ノ一証ニ奏スルモ再ヒ得シテ諸ヲ此ニ施スニ必シモ復タ彼カ如リ効アラストス。○是ヲ以テ察シテ通用ノ措方及ヒ諸術ヲ記載スト雖モ學者ニ裨益スルイ能ハサルノミ。○是故ニ余將ニ一二ノ原由ヲ援引シテ其較著ナル者ヲ列シ是ニ由テ以テ其治法ヲ備明スベカラシメ。其始ニ於テ先ツ常ニ習ヒ知ル所ノ者ヨリシテ其說ヲ示ントス。

右第百六十七章惡心乾嘔ノ病因ヲ論ス

大凡率子其惡心ヲ催ヌ所以ノ者ハ皆其飲食以ル所ニ係ル。蓋シ其飲食スル所ノ者身體ニ害ア

ルガ為カ。或ハ其力ノ能ク容納シ能ク消磨スル
ニ耐ルノ分外ニ餘テ過度ナルガ為カニ因テ。此
証ヲ發スト知ルヘシ。○是ニ於テ昂便頓ニ見ル
天為ノ妙用。造物ノ機乃懇到周旋。至ラザル所ナ
キ一ヲ。蓋シ人身自然ニ備具スル所ノ良知能ニ
從テ運動ヲ作スノ諸器。其死廢スルニ於テハ。復
右ノ如ク其不利ナルノ害ヲ排斥スル等ノ一ツ
當為スル一無ク。只其生活セル身體ニ於テノ一
當然ノ運動。千緒萬端。理ノ如クナラサル一無キ
ニ據テ之ヲ察スレハ。其情以テ見ツベキノ一。○
諸物ノ毒アルニ値ヒ。或ハ吐藥ヲ服シ多ク下劑

ヲ用ルニ於テ惡心ヲ發スルハ。皆右ノ理ヨリシ
テ來ル者ナリ。○飲食ハ人ノ必ス須テ以テ生存ス
ル闕ベカラザル所ノ者タリ。然レ之ヲ用ル一過
多ナレハ。則チ亦惡心ノ証アルニ至ルナリ。○此
等ノ諸因ハ。皆其外ヨリシテ由來スルガ為ニ自
テ知リ易シトス。然レテ之ヲ治スルノ法。若シ其
自己ヨリシテ吐キ除キ一能ハザル者ニ至テハ
吐法ニ由テ之ヲ出シ除クヲ要トスルナリ。○若
シ夫レ甚多ク飲食シタルニ因ル者ハ。其咽噎ヲ
探テ其ヲシテ吐ク逆ヘシムレハ。則チ是レリ。此
ノ法。誤リ投シ錯ヘ施スノ害ヲ蹈ムノ患無シテ

極テ佳ナリトス。然レ若シ諸有毒ノ物或ハ腐壞
變敗セル物ヲ飲食シテヨリ發シ來リタルノ際
其毒若リハ腐壞變敗セル有害ノ物ヲ吐キ除シ
カ為ニ和緩ニシテ脂油ニ係レル汁液ヲ飲服ス
ト雖モ意ノ如リ吐スルイ能ハサルノ記ニ臨テ
ハ。第十五章ノ吐劑ヲ用ヒ。且ツ大ニ汁液ヲ飲シ
メテ。其物ヲ吐キ除カシムルヲ良トス

右第百六十八章惡心乾嘔飲食因ル記治シ論ス

夫レ未タ嘗テ航海ニ習ハサルノ人開帆ノ後始
テ洋中ニ達シ。風浪ニ震盪飄搖セラル、ノ際ニ
臨テ。必ス舩暈ヲ發シ。嘔ニ惡心乾嘔ヲ發スルノ

ミニアラス。亦吐スルイアルニ至ル者ナリ。之ヲ
譬ルニ猶ヨ身ヲ以テ頻ニ一處ニ輪轉^{ルン}轉^{ルン}旋シ。若
クハ急遽煩數ニ身體ヲ攪擾スルガ如シ。其靜止
シテ久キヲ經ルニ非ルヨリハ。其餘勢ノ盪擾ス
ル所其坐起行歩ニ於テ意外ノ顛掉傾儀ヲ救ハ
ス。跟^跟踏^踏眩^眩錯^錯ヲ免レザルノミニアラス。亦惡心等
アルニ至ル者。間コレアルナリ。○是ニ由テ之ヲ
觀レハ。胃ノ運動ノ感觸ニ敏ニシテ。攪乱ヲ為シ
易キイ。以テ見ル可キノミ。故ニ常ニ粗ザル所ノ
運動ヲ發作スルトナハ。胃ヲシテ感觸攪擾セシ
ムルカ故ニ因テ以テ惡心乾嘔ヲ催スナリ。○此

証ノ如キ。一モ吐發スヘキ者有カ為ニシテ爾火
ニ非ス。故シ以テヒタスラ只管惡心アツテ乾カ吐スルノ
之ヲ治スルモ亦吐法ヲ以テ從事セス。唯其因シ
ノミ鎮定靜止スルヲ要トスヘキナリ。○右ノ如
キ非常ノ動作ニ因テ胃ノ運動ヲ感觸シテ。此証
ヲ發スルニ臨テハ。逃カ不ナ過ス趁タ早チニ全ク然ク其因
ヲ除キ去ルト雖モ。其証是ニ應シテ昂チ愈ル
ハ之ナキ者ナリ。此其餘勢ノ為ス所ニシテ廻チ
爾リ。○此ニ至テハ列レ應セ設セ酒ヲ許シ取テ承テ以
テ之ヲ滋調シ。之ニカシノ香ラ撮リ汁ヲ及ヒ牽ラ達ス扭ル護
律規リ需ム護ル一ニ滴ヲ或ハ白ク鬚ヲ粟ヲ人ノ舎リ別カ許シ加

調シテ。稍々ニ之ヲ服シ以テ胃ノ其ニ感動攪擾
セ蒙タルノ勢ヲシテ。大甚ナルニ増進スルト無
ラシムルヲ良トス。

右第百六十九章惡乾嘔身體運動因ル証治ヲ論ス
此証證ニ身體ノ運動常ク弛シ度ク失フニ因テ
胃ヲ攪擾感觸スルヨリシテ之ヲ致スノミニ非
ス。諸物ノ旋轉盤回スルヲ見。或ハ其性ノ惡ク忌
ム所ノ飲食ヲ見。若リハ曾カ徑テテ飲食シテ以テ吐
ニ至リシ所ノ物ヲ見ルニ因テモ。亦能ク惡心等
ヲ發スル者ナリ。是ニ由テ之ヲ觀レハ。其胃ノ運
動ノ感觸ニ敏ニシテ。近小ノ因ト雖モ。亦能ク其

ツシテ輒テ發作セシムルイヲ為スニ足レリト
云フ。以テ知ヘキノミ。○斯ニ説ク所ノ証ニ至テ
ハ。之ヲ治スルノ法。茶ヲ用ルイヲ稀ナリ。然レモ若シ
藥ニ由テ之ヲ治セニイシ需ルニ値ハ、第百六
十九章ニ於テ説興スル所ノ法方ニ依テ斯ニ從
事スヘキナリ

第百七十章惡心乾嘔意思感觸齒ル証治ヲ論ス。

第百六十八章ニ説ク所。腐壞シタルノ物ヲ飲食
シテ。因テ惡心ヲ催スガ如ク。體中見ルベカラザ
ル内因ニテ。腐壞液ノ他處ヨリシテ胃中ニ送リ。
或ハ固ヨリ胃中ニ在テ腐壞セル者。亦能ク同証

ヲ發スル者ナリ。○胃中ノ液大抵里尔汁及ヒ膽
汁。此其所謂體中見ルヘカラザル内因ナル者ナ
リ。又其神經動脈及ヒ門脈ヨリシテ。一二ノ腐壞
液胃中ニ滲漏淋漓スルイ有リ。其ニ右ノ如ク同
証ヲ發スルナリ。或ハ其諸液素良善ナルカ。其處
ニ鬱滯スルニ因テ腐壞シ。爾ク非常ノ運動ヲ胃
中ニ起スニ至ルニ及テ。所謂惡心生ス。此等皆其
因内ニ在テ。外因ヨリシテ來ルノ從事ニ易キニ
比セス。○右件ノ諸因。其出ル所ノ原。各各同シカ
ラス。常庸ニ在テハ。之ヲ知ルイ能ハス。然レモ高醫
ニ於テハ固ヨリ能ク甲ハ某ヨリ發シテ。而乙ノ

原ハ某ニ在リ。彼ハ某ニ因テ起ルノ記ニシテ。此
ハ某ニ属スルノ候タリト云イテ診察スルニ
レリ。○若シ其惡心ノ証或ハ粘液ヲ吐スルカ。或
ハ腐敗膽汁若クハ他物ヲ吐スルニ由テ安リ。而
シテ後又新ニ發スルノ記。食ヲ思ハス。胃ノ部位
ニ當テ苦煩シテ痞滿膨脹スルイアリ。暖シテ又
リ。風氣ヲ出シ。口ニ苦味ヲ發シ。腐臭ヲ為ス等ノ
諸件現シ來ルハ。即是レ胃中ノ腐壞毒ヨリ發ス
ルノ惡心ナリト察スベシ。○治法宜ク先ツ第一
ニ其腐壞毒ヲ捷徑ヨリシテ發遣スルニ。第十五
章ニ著ス所ノ吐藥ヲ以シテ。其原ヲ滌除スベシ。

甚タ良ナリ。其後第二十章ニ出セル健胃劑ヲ用
ルヲ妙トス。然シテ之ニ從テ大便利也ス。宜ク
之ニ少ク不利ノ劑ヲ和調シ。常ニ大便ヲシテ順
利ニシテ中適ナラシムベシ。○若シ夫レ胸膈燒
カ如ク懊懷煩悶シ。並ニ發熱ノ証有テ與ニ添ヒ
來ルハ。是レ酸腐ナル膽汁ヨリ出ルノ惡心ナリ
ト知ヘシ。是証ニ臨テハ。宜ク意ヲ固テ務テ其膽
汁ヲ泄除スヘシ。何トナレハ。若シ速ニ之ヲ泄除
セカシテ滯留セシムルトキハ。胃ヲ出テ腸中ニ
下流シ。亦能ク痢疾ヲ發シテ痛アルイヲ致シ。或
ハ其血中ニ混淆スル則チ燒カ如キ熾盛熱ヲ發

其疾タル固ヨリ治ヲ為シ易カラス。詳ニ第二
 十五章ニ於テ之ヲ説ク。又每ニ多ク熱毒ノ胃中
 ニ在テ。胃自ラ之ヲ出シ除シテホルノ証アリ。
 余屢之ヲ驗スルニ。其惡心ノ後必ス吐ヲ以テ之
 ニ從ヒ。粘液若クハ腐敗膽汁ニ似タルノ毒ヲ吐
 スル者ナリ。○右ノ如キ吐ヲ為スニ値ハ。宜ク
 和柔緩瀉ノ液ヲ飲シメ。以テ胃ヲ助ケテ其ヲシ
 テ吐泄シ易カラシムベシ。○然レ若シ只右ノ如
 ク吐シテノ後。其惡心尚存シテ歇サル者。及ヒ惡
 心ノ証。只持ニ熱病ノ擾乱ニ因テ。偶ルトシテ一
 タヒ發シタルニハ。次ニ記スル所ノ方ニ由テ。其

常シ疾ヒ妄行スルノ運動ヲ鎮定スルヨ宜トス。
 惡心ヲ治スル飲劑方

- 精大麦 各八錢
- 酸模根 各八錢
- 玫瑰花 半盞
- 水 二百錢

右件合シテ密閉セル罐中ニ於テ。徐々ニ之ヲ
 煮麥煎シ湯成テ。次ノ菜ヲ和調ス。

- 香椽汁 八錢
- 白葡萄酒 十六錢
- 白罌粟舍利別 八錢

右ノ飲劑ヲ取テ。其ヲシテ屢服セシムヘシ。然レ
氏毎服少許ヲ用ルルヲ佳トス。

若シ粘液ノ胃中ニ在ル者。業已ニ之ヲ發泄スル
イヲ経テ後。其熱病ノ証ヨリハ。罷弱ノ候多キイ
ヲ驗シ得ルイアラハ。宜ク次ノ方ヲ用ヘシ。
惡心ヲ治スル少飲劑ノ方

香椽汁 八匁
酒石鹽 一匁

右件茶相ヒ合和シ。其自ラ沸騰泡起スルヲ候
テ次ノ茶ヲ加ヘ調ヌ。

薄荷水 四十八匁

右ノ茶ヲ取テ。一匙ヲ飲服スル。日ニ數次○
若シ薄荷水無リハ。大麥水ヲ用テ之ニ代ヘ。薄
荷油一滴ヨリ三滴ニ至ルマテヲ加フベシ。其
薄荷油始メ先ツ砂糖カ許リ以テ之ニ和シテ。
廻ナ調勻スルイヲ得。

右第百七十一章惡心乾嘔昏中腐壞毒ニ因ル証治論
ス。

其吐茶ヲ用テ胃中ヲ滌慮スルハ。胃中ニ物有テ
是ヨリシテ此惡心ヲ發スルノ証ニシテ廻ナ能
ク治スルニ至ル。若シ胃及ヒ其近傍ニ翁蕪ムスカ麥
金匱キン或ハ羅斯ロヲ生スルニ因テ。此ノ惡心ヲ發ス

ル者ニ。右ノ吐方ヲ施ストキハ。其命保シ難キニ
至ルナリ。此處至テ緊要關。知ヤスハアル可ラス何
トナレハ其患處重テ吐劑ノ為ニ重困
セラレ。且其菜カノ勢攪擾シテ進テ止マズ。後ニ
爾リ吐シ催シ益煩劇スト雜モ。物ノ吐發スベキ
ナク。胃氣罷勞シ。精力乏竭シ。終ニ斃ル。ニ至テ
而シテ止ムノ^レ。○是シ旨テ切ニ要ス斯ニ從事
スル者。診察函券。考按審ナラカシテ。惡心ノ記發
熱有テ馬ニ配スル者ニ。吐劑ヲ与テ妄ニ之ヲ攻
撃スル^レ勿ラシ^レ。何トナレハ。若シ其惡心ノ
証。懊懷苦煩極テ甚タ。熱痛動暴冒ノ部位ニ直リ。

及ヒ飲食ヲ送下スル毎ニ。大ニ苛痛ヲ發シ。或ハ
又胃中ニ於テ。火發スルカ如キノ状ヲ催シ。發熱
持長シテ漸サルニ出來ルハ。是レ其惡心。右ノ胃
及ヒ胃ノ近傍ニ生シタル羅^弱斯及ヒ翁^弱萬^弱私^弱多^弱金
屈ヨリ察スルノ傍証タル^レ明ケシ。此事余カ著
ス所ノ瘍科精選ヲ見ヨ。尽ク其二篇ノ中ニ之ヲ
詳論セリ。○此証ニ及テハ。宜ク意ヲ以テ營求シ
テ。其惡心ヲ鎮靜スルニ。前已ニ第百七十一章ニ
於テ記載セシ所ノ飲劑ヲ以テシ。後テ而シテ胃ノ
部位ニ外傳スルニ。一ノ罨劑ヲ以テスヘシ。罨劑
部。布^{一ナリ}。散見ス。共
其方玫瑰花ナラヒニ接骨木花

ヲ取り。調勻スルニ醋ヲ以テスルニ出ツ。
右第百七十二章惡心乾嘔翁萬ト秘ト金屈及ヒ羅斯
因ルノ証治ヲ論ス

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

嘔吐篇第二十八
嘔吐ハ羅旬ノ忽ホ密都ト秘トナリ。原ルニ夫レ胃ノ細
筋織條其常ニ逆シタル運動ヲ發起スルニ因テ。
胃中ニ在ル所ノ者ヲ上食道ニ向テ之ヲ湧ト發ス
ル下例スルニ惡心スルイ有テ。尋テ其腹筋ノ舒
引拘攣スルカ爲ニ。迺テ胃中ニ在ル所ノ者ヲ擧
テ諸ヲ食道ニ托出シ。又從テ諸ヲ口ヨリシテ嘔
吐スルイヲ爲スナリ。即テ此ヲ名テ嘔吐ト曰フ。
○若シ胃中吐出スベキ者アルイ無クハ。則チ
口ヨリシテ嘔出スル所ナシト雖也。依然トシテ
嘔シテ吐スル所アルト証ヲ同シ。復其吐出スベ
百七十三

キ物有サルニ由テ。只得テ膽汁ナラビニ胃中ニ
賦在スル所ノ天資固有ノ滑液也。嘔吐セシ
惡スルノ意思催シテ輟ザル者ナリ。○時有テ亦
能ク其運動ノ変態ニ從テ。胃ノ上口閉塞スル
ナリ。然ル時ハ其物ヲ吐出スルヲ能ハス。是ヲ以
テ患人煩悶撩乱スルヲ多ク。諸ヲ快吐ヲ得ルニ
比スレハ殊ニ甚劇ナリトス。

右第百七十三章嘔吐ノ大較ヲ論ス

夫レ嘔吐ノ病タル其自由上ノ惡心ノ証ト同一
象ニシテ甚々殊ナラス。但其微甚ヲ以テ之ヲ分
別シ。其發患ノ大ナル者ヲ就テ以テ嘔吐ト為ス

ニ外ナラザルノミ。是故ニ此ノ嘔吐ノ篇ニ於テ
說與シ。學者ヨシテ意ヲ注セシムベキノ件々。已
ニ尽ク上ノ惡心篇ニ於テ之ヲ講明ス。讀者其レ
參考シテ互會スヘシ。

右第百七十四章嘔吐病因ヲ論ス

此 嘔吐ノ由テ起ル所ノ象ハ。常ニ胃ノ運動ノ
衰弱シタルニ出川。何トナレハ。胃ノ運動衰弱ス
ルトキハ。其中ニ灌注スル所ノ諸液及ヒ受納ル
所ノ飲食ヲ推盪轉輸スルヲ。平常ノ如ク順溜ナ
ルヲ能ハス。○然ルトキハ。其諸液飲食胃中ニ滯
留シ。漸漸ニ推積累聚シ。自ラ重困シテ其任ニ勝

サルニ至リ。終ニ嘔吐ヲ發スル者ナリ。或ハ底止
鬱著シテ。變ニテ留飲和液腐敗液等ト為ルトキ
ハ。則チ始メ先ツ惡心ヲ催シテ。後テ而シテ此ノ
嘔吐ヲ發スルニ至ルナリ。○其腐敗液ヲ吐發シ
テ後ハ胃之ガ為ニ虛衰罷弱シテ患人多ク留飲
和液及ヒ腐敗變壞ノ液等ヲ嘔泄スルナリ。其物
何レノ處ヨリ斯ノ如ク將出ニ來ルト云フ辨ス
可カラサルカ如ク然リト雖モ。是レ他故ナシ。只深
ク思ハサルノミ。何トナレハ。此其胃中ニ底止鬱
著スル所ノ諸液只其底止鬱著スルカ故ノミニ
シテ以テ自ラ伊ノ腐壞ノ阻ヲ貽ルナリ。

右第百七十五章嘔吐胃衰弱ニ因ル論ス

其胃中ニ多ク腐敗液等アルニ因テ嘔吐ヲ發ス
ル者ニ於テハ。始メ先ツ第十五章ニ載ル所ノ吐
劑ヲ用テ。之ヲ遠スルヲ宜シトス。○然モ若シ胃
徑テ之ヲ吐セシメタル者ニ於テハ。復タ右ノ方
ヲ事トスル所ナシ。第十六章ニ出ス所ノ方ニ依
テ。其後ヲ兼テ一タヒ之ヲ下利スルヲ儘可ナリ。
此其腐壞液ノ腸中ニ波及シ存スル者ヲ既出ス
ルカ為ナリ。○右ノ如クニシテ後ハ。患人ヲシテ
大食縱飲スルヲ禁止セシムヘシ。以テ其胃ノ
カヲシテ大ニ官能ヲ運營スルカ為ニ。蘇僂勞弊

スル一無ク。安佚ニシテ其任ニ勝テ餘格アラシ
ムル所以ナリト知ベシ。且其油膩ノ物ヲ食ヒ及
ヒ消化シ難キ人類ヲ用ル一ヲ節減セシムベシ。
右等ノ調撰至テ緊要トスル所ナリ。○其間須ク
胃ヲシテ強壯ナラシムル健胃劑ヲ用ヘシ。則チ
持久ニシテ差サルノ吐。漸々ニ將ニ癒ントス。方
ハ第ニ十章ニ見ヘタリ。○若シ夫レ胃ノ衰弱ヲ
將來ル一。多ク飲酒シ及ヒ慄悍酷烈ナル廢飲ヲ
用ヒタルニ出ル者ハ。此ヲ胃ノ虛寒ニシテ衰弊
セルノ証トス。諸ヲ故ニ復スル一一大難事タリ
何トナレハ。之ヲ治スルニ雄力健運ノ精銳ナル

第ヲ用ル一ヲ廢メ退クルトキハ。胃ヲシテ運行
遲滯シテ健ニ宜解リ營為スル一能ハサラシム
是ニ於テ胃中ニ在ル所ノ物。尽ク底止滯著シテ
腐敗變壞シ。以テ逆ニ變壞セル寒液ヲ成スナリ。又
其ヲシテ強壯ナラシメシカハ。雄力健運ノ峻
策及ヒ熱氣ヲ發動スルノ劇劑ヲ与レハ。時日ヲ
重ルノ後。必ス其胃ノ細筋纖維。尽ク其力ヲ悉ヒ
銷斃盡スルニ至テ而シテ後止ム。此其治シ難
シトスル所以ナリ。是ヲ以テ其雄力健運ノ菜。漸
ク以テ稍稍ニ減損シ。其間ハ第ニ十章ニ出ヌ所
ノ健胃劑ヲ用テ。胃ノ力ヲ強壯ニシ。其諸液ヲ維

持保護シテ。変壞ニ至ラサラシムルノ原由ヲ輔
翼資養スルヲ以テ良法トスルナリ。

右第百七十六章嘔吐ノ治法ヲ論ス

不食篇第二十九

羅甸ノ菴貌アンカ吉沙キシヤハ。食シ思フノ機ヲ卷亡スル
ノ病ナリ夫吾カ人類ノ生存スル天道ノ機ヲ究
メ尋ルニ。凡ソ此ノ身體百骸九竅府藏脉絡ヨリ。
皮膚毛髮ノ微ニ至ルマテ。總テ之ヲ大別スレハ
二類タリ。其一ハ。形質定實。固結シテ把撮スベシ。
其二ハ。性状柔虛。流動シテ捉摸スベカラス。凡ソ
此ノ二類ノ諸物。吾カ人世日用ノ動靜云為百爾
ノ運営ニ因テ。其形質定實。固結シテ把撮スベキ
ノ諸物ハ。日日ニ稍以テ弊盡シ。其性状柔虛流動
シテ捉摸スベカラザルノ諸物ハ。相彈ヒキテ頑蒼荒

癯シ。漸漸ニ此ノ身體シ謝シ去ルナリ。其形質定テ把撮スヘキノ諸物ハ畧シテ之ヲ言ヘ。實。固。結。節。瓜。牙。提。藏。府。脉。絡。皮。膚。筋。膜。等。是。ナリ。性。狀。柔。虛。流。動。シ。テ。腦。髓。精。血。涎。唾。津。液。膽。汁。脂。膏。等。是。ナリ。詳。ニ解。体。諸。器。然。氏。其。弊。盡。下。頑。癯。ト。ノ。輒。跡。ヲ。見。サ。バニ。見。タ。リ。者。ハ。其。日。用。ノ。飲。食。斯。ニ。資。養。シ。斯。ニ。更續。シ。以。テ。夫。ノ。二。類。ノ。諸。物。ノ。シ。テ。弊。盡。頑。癯。ノ。後シ。承。繼。シ。テ。陳。新。相。易。リ。出。納。相。計。リ。其。シ。テ。間。歇ノ。跡。ヲ。見。サ。ザ。ラ。シ。ム。ル。ガ。故。ナリ。此。其。飲。食。ノ。資養。ハ。以。テ。一。日。モ。闕。リ。ベ。カ。ラ。ザ。ル。所。以。ナリ。○夫レ。既。ニ。然。ク。人。命。ノ。係。ル。所。ニ。シ。テ。一。大。緊。要。コ。レ。ニ如。ク。者。ナ。キ。ト。キ。ハ。其。コ。レ。ヲ。倍。ス。ル。ノ。母。寡。遲。速。若

シ。從來他ヨリシテ曉知スベカラザラシメバ毎ニ過不及等ノ失有テ。是亦一大緊難ノ務ナラズヤ。然ルニ造物者ノ斯ニ周密ナル。為ニ一箇ノ異能ヲ與フ。此ヲ饑シ覺ルノ意ト云。又之ヲ食ヲ思フノ欲ト謂フ。是ノ饑テ食ヲ思フノ欲ノ萌シ發スルニ臨テ。此ヲ節度トシテ。以テ飲食ヲ資養供給シテ。暗ニ其宜ニ適フイヲ得セシム。是故ニ。此ノ一箇ノ意思ハ。亦一大緊要。因テ以テ飲食資養ノ體中ニ消耗匱竭シ。是ニ於テ以テ供給更續スベキノ時ヲ知ルイヲ得ル所以ノ者ナリト知入シ。○然ルニ若シ飲食資養。體中ニ消耗匱竭シテ

吾輩ノ極テ能ク其然ルイヲ知ルイ。假令ハ一二
次ノ食スベキ時節ヲ過テ飲食ヲ供セサルカ如
キ。宜ク饑テ食ヲ思フベキニ。尚其欲ノ萌起スル
ニ値サルイアル。是ヲ名テ食ヲ思フノ機ヲ惑亡
スルノ病ト云ナリ。

右第百七十七章不食ノ大較ヲ論ス

其食ヲ思フノ欲ノ由テ来ル所ノ者ハ。天道自然
ノ機巧ニシテ。飲食胃中ニ缺乏スルト。資養遍體
ニ消化シテ。新ニ供給ヲ仰リトノ際ニ出ツ○然
レ其飲食胃中ニ缺乏スルヲ覺ルノ意。他物ニ障
礙セラル、イ有トキハ。連ニ是ニ應シテ其意シ

崩スイナシ。是故ニ其障礙スルイナリ。連ニ其缺
乏ニ應シテ。即チ其意ヲ達シ見ハスヲ待テ。迺チ
自然ノ常ニ合フコトヲ得ルナリ。然シテ其饑ルノ
意ヲ覺ルノ機ハ。一ニ智其事ニ与ル所ノ諸官ノ
所能ニ係ルト知ヘシ。○是ヲ以テ飲食資養。胃ト
遍體トニ消乏シタルヲ覺ルノ機ヲシテ。閉格シ
テ即應セザラシムルノ由テ来ル所ハ。諸般ノ原
因有テ之ヲ為スナリ。今其中ノ較著ナル者ヲ援
引シテ。之ニ附スルニ各其治法ヲ以テセントス。

右第百七十八章不食病因ヲ論ス

凡ソ人饑ルノ時ニ方テハ。營ニ資養ノ遍體ニ消

耗スルノミニアラス。胃中ノ水穀已ニ空虚ニシテ。胆府ノ汁液適ニ満盈スト知ルヘシ。夫レ膽汁ハ是レ其肝ヨリ為ニ製造シテ以テ傳輸スル所。其製シテ之ヲ送ル。常ニ為ニテ輟ス。消々トシテ之ヲ納ル。故ニ以テ其胆府中ニ満盈シテ復々容纳スルニ地ナキニ及テハ。迺チ流溢シテ十二指腸ニ注キ。夫ヨリシテ旁且ツ胃中へ浸淫シテ。迺チ此ノ餓ヲ催スノ意ヲ覺知セシムルナリ。○若シ其胃中ニ粘液多ク充塞スルニ値テ有トキハ胆汁並ニ大機里^{キリ}汁。親ク胃ニ抵リ觸テ。其シテ然ク餓ヲ催ス。イリ知シムルノ感應ヲ障遏スルカ故ニ。餓ヲ催ス。イナク。食ヲ思ハザルナリ。○右ノ因ヨリシテ發スルノ証ヲ知ント要セハ。其候胃ノ部位ニ當テ痞脹満實シ。飲食セスト雖モ重滯飽満シテ食ヲ思ハズ。噯シテ從ニ風ヲ泄シ。自ラ其寒冷シ且ツ重難ナルイリ覺フ。其尤モ較著ニシテ知易キハ。患人粘液ヲ吐スレハ是ニ由テ甘キ安キイリ覺フ。此等ノ証候ニ據テ微スルトキハ。則チ知ルベシ。即チ第五^ノ章ニ出セル吐劑。是ノ証ニ用テ甚タ宜トス。○此其以テ胃中ノ粘液ヲ寛メ泄スルカ为ナリ。然レ其方唯從來已ニ鬱滯スル所ノ者ヲ條除スルノミニシテ。又

1

新ニ生スル所ノ者ヲ防キ治スルイ 蘇ハザルガ
故ニ直ク之ニ禦ルニ次ノ健胃劑ヲ以シテ。從テ
之ヲ服セシムヘシ。

解結散鬱ノ健胃酒方

葛而儒整之涅實屈室

茵陳 各二溢

盧會

酒石鹽 各二錢

右件合シテ二百四十錢ノ白葡萄酒ニ浸シ。其
藥酒ヲ取テ每服一茶匙許。日ニ三次空腹ニ服
ス。○若シ是ニ由テ下利スルイ多キ者ハ宜

ク少ク方中ノ盧會ヲ減スヘシ。○或ハ次ニ出
蘇ス所ノ了腐去ル二十滴。又ハ其餘ヲ取リ。葡萄
酒若クハ他ノ液少許ヲ以テ之ヲ服スヘシ。亦
良ナリ。

解結散鬱ノ健胃劑方

越栗失尔 剝緑布利胆室私 扒刺設兒失 四錢

酒石鹽 一錢

薄荷油 五滴

右件茅合シテ之ヲ調勻ス。劑名コレヲ了腐去
ルト云。

右茅百七十九章不食胃中粘液。因ル記治ヲ論ス。

膽汁ノ胃ノ疎建ニ抵リ薄ルイシ障礙スルイ有
テ膜ノ質ヲ指テ言フ。昂チ直ニ胃ニ抵リ薄ルノ内
義ナリ。蘭人語極テ委曲細安。故ニ耳目ノ長カト疑
ル所。遠ニ見テ却テ眩惑シ惹キ。或ハ冗長カト疑
フ。實ハ然ラ以テ不食ノ証シ發スルニ論ナシ。廻
チ全然トシテ此胆汁ヲ障礙スルノ害アルイ無
ト雖モ。若シ其胆汁天性ノ變スルイ有テ石鹽ノ
如キ功カシ脱失スルトキハ。逃^{カチラズ}不過不食ノ証シ
發スル者ナリ。何トナレハ。胃中ニ賊在スル所ノ
天道ノ和液ヲ散渙解除スルイ無カ为ニ。其証亦
猶前ノ和液ノ因ト途シ殊ニシテ歸リ同シ。共ニ
此ノ不食ノ變シ發スルナリ。○唯其膽汁變壞ス

ルイアルカ。若シハ腐敗ノ害ニ傳染滲漏脊シテ之
ト偕ニ變壞シタルガ如キハ。則チ之ヲ明察スル
イ。一ニ胃ノ部位ニ直^{アタ}テ燒カ如リナルイシ覺ベ
辛烈熱悍苦味ノ氣臭ヲ受送シ。毎ニ極テ臭穢ナ
ル汚液ヲ吐發シ。且ツ配シテ所謂癸^ス斯^ハ孰^シ需^ム謨^ハ食
シ見テ乾嘔シ惡食シテ食スルイ能ハサルノ証
アルシ以テ之ヲ徵ス。昂チ之ヲ治スルニ。酸味ノ
菜劑タトハ八香椽汁是ニ和調スルニ水ヲ以テ
スル等シ与テ。其食シ思フイシ催シ誘スベシ。○
然氏其膽汁腐壞セルイ過滋ナルイシ辨セハ甘
乳酪^清出^註上^ニ及ヒ酒石ヲ用テ之ヲ消解シ。亦メ

テ以テ下利ヨリシテ之ヲ瀉シ除クヘシ。○其膽汁甚々稀涼ニシテ且ツ酷厲ナルヲ察シ得ルイアツテ。而シテ前法ニ依ルノ其治尚未ダ緊切ニ對當セザルイシ辨セハ。始メ先ツ吐利ノ劑ヲ用テ之ヲ兩道ヨリシテ泄發シ。然シテ後第百七十一章ニ載ル惡心ヲ治スルノ飲劑ヲ用ヘシ。但其方中ノ舍利別シタルヲ佳トス。

右第百八十章不食ノ膽汁變壞因テ証治ヲ論ス。遍體中ニ發スル所ノ諸病皆能ク其液ヲシテ滋長汎溢シテ胃中ニ浸溢シ。道ニ食ヲ思フノ機ヲ妨奪セシムルイ甚々多シトス。○中ニ就テ其尤

モ彰明ナルハ傳染シテ轉々腐敗ニ進ムノ毒ニ出癸シタル者ニシテ。竟ニ此ニ化セラレテ腐敗ノ毒液トナルヲ。即チ腐敗熱病熱病ノ一種ニシテ熱毒轉々相シ腐敗行クノ証アリ。第ニ癆瘵此亦壞液ヨリシ十五章併セ考フヘシ。及ヒ内ニ發スル諸腫毒ノ類ノ併セ考フベシ。如キ是ナリ。其腐敗變壞スルノ毒苟モ胃ニ蒙被スルトキハ。輒チ其食ヲ思フノ機ヲ奪フナリ。此証甚々多ク有トコロナリ。○右ノ諸病ヨリ皆能ク此ノ不食ノ証ヲ發スルカ爲ニ。須ク知ルヘシ其証ニ臨テ。徒ニ其不食ヲノミ擬議シテ治ヲ施ストキハ。許多ノ功ヲ費スト雖モ。勞ニテ驗ナリ

全然トシテ應セサル者ナリ。何トナレハ。其原彼
ニ在テ此ニ在サルカ爲ニ。必ス其原ノ在ル所ニ
就テ其本ヲ治シテ。然後其標ナル不食ノ証ハ更
ニ事トスルイリ。待カスシテ自ラ愈ルナリ。或ハ尋
常ノ胃家ノ劇モテ。少ク之。誘發スルモ亦得。

右第百八十一章不食ノ諸腐壞液胃中ニ浸注スルニ
因ルノ証治ヲ論ス

西説内科撰要卷十一終

西説内科撰要卷十二

遠西

王函涅斯孫我爾德兒著

日本 津山 宇田川玄隨 譯
鑿宦法眼桂川南周國瑞 閱

善饑異嗜篇第三十

羅旬ノ過百底衛。私西理奴私ハ此ニ譯スレハ常
ニ反シタル詭異ノ食欲ト云ノ義ナリ。惟ルニ夫
レ食欲ハ。亦是レ知覺意識ノ一種ナルガ故ニ。常
ニ定リタル所因有テ。之ニ觸テ以テ催ノ者ナリ。

眼ノ光彩ニ應シテ曲ニ之ヲ分別シ。耳ノ聲音ニ
隨テ立トコロニ之ヲ采聽スルト。一般共ニ事物
ヲ知覺シ感觸シ。領識スルノ器ナルカ故ニ。茲ニ
常ニ異ナル所因有テ此食欲ニ及フトキハ。隨テ
即テ常ニ反シタル知覺領識ノ詭異ナルヲシ
ス。此事吾輩又自餘ノ知覺ヲ至ル諸器ニ於
テ之ヲ覈實ニス。○其常ニ反シタル意思ノ催ス
食スルイシ缺イ無クシテ能ク一タヒ饑ユ。其胃
飽果ニシテ猶然ル者ハ。即テ所謂牛餓ナル者ナ
リ。○吐シテ後胃中空虚スルトキハ。頓ニ饑ヲ發
シテ食ヒ。食テ復タ吐シ。吐シ訖テ復タ饑ルハ。即

テ所謂狗餓ナル者ナリ。○然氏只其胃ニ於テ常
例ナラサル意思ヲ催シ。喜テ常例ナラサル食品
ヲ喫セシイリ望ミ。又食品ニ非ルノ物件ヲ嗜ミ
食フイアリ。此ハ妊婦人ニ於テコレアル異嗜
ノ一記ナリ。又顔色悅澤ナラスシテ蒼黯ナル記
ノ處女ニモ之アリ。即チ就テ辨シテ處女餓ト云。
羅旬ニ是ヲ和棘西ト曰フ。漢醫ノ所謂惡
阻ナリ。妊婦ハ三月多ク是記アリト。醫學堂函
二見。處女病ナル者ト併セ考ヘシ。

右第百八十二章善飢異嗜大較ヲ論ス
善饑異嗜ノ病タル。其食欲ヲ發スルイ甚詭異ニ
シテ名状スベカラス。尽ク之ヲ列次シテ以テ查

考セシヨリハ。治療ノ術ニ於テハ。其異嗜ヲ發スル所以ノ原因ヲ蹤跡シテ其治ヲ擬議スルナリ。大ニ斯ニ從事スルノ當務タリト知ルヘシ。○其發スル所ノ証候多端ナリト雖モ之ヲ要スルニ大約極テ是レ由來スル所常ナラスシテ。其饑ヲ催スイテ想像スルノ畧ニ蒙被シ加ハルナリ。是ヲ以テ患人ヲシテ黽勉トシテ其欲ニ當テ望ヲ塞ンイテ營求セシメ。當ニ食品ニ於ルノミナラス。自餘無益ノ物類ト雖モ復々擇イナリ。甚キハ廻テ見ルニ隨ヒ得ルニ從セテ。務テ其意ニ適スルイテ求ルニ至ルナリ。

右第百八十三章善飢異嗜ノ病因ヲ論ス

毎ニ多ク小兒ニ於テ大ニ饑テ其欲飽シムヘカヲザルノ証アルイテ見ルニ。又且ツ斯ニ一箇ノ怪ハベキ異証アリ存ス。右ノ如ク多ク食スルカ故ニ。理當ニ身體モ長シ肌膚ヲモ生スヘキニ却テ羸瘦スルイアル是ナリ。○其小兒シハ心腹ノ痛有テ。大抵毎ニ亦消化製造ヲ強サル大便ヲ通利スルイ多シ。且ツ大抵皆酸味ノ氣臭ヲ為ス者ナリ。○若シ吐スルイ有トキハ。吐スル所ノ者亦同ク酸敗スルイヲ為セル者ナリ。且ツ未タ飲食セサル小兒ノ如キハ其吐覘スル所ノ乳亦同

ク酸味ヲ成シテ凝結ス。漢説ニ所謂嘔酸善ノ諸候。皆以テ其酸敗ノ穀滋ニシテ。胃中ニ侵刺襲
戦スルニ因テ。爾少常ニ及シタル異ナル食欲シ
發シ。及ヒ斯ノ如キ善リ餓ヘ食シ訖テ仍飽イテ
知ザルノ諸記ヲ生スト云イテ知ルニ足レリ。○
此其生平愛養ノ致ス所。諸ノ食品ニ於テ禁節ス
ルイテ善セサルカ故ニ。其喫スル所ノ者皆温暖
ノ處ニ鬱積シ。變壞シテ此ノ酸敗ノ物ト化シ以
テ右ノ諸記ニ至ルト知ルヘシ。○或ハ既ニ右ノ
記ヲ發シテノ後ニ及テ。諸物ヲ喫スルイテ禁止
シ。肉ニテ製造シタル者ノ外ハ之ヲ用ルイテナキ

ガ如キモ。亦未タ得タリトセズ。何トナレハ。此酸
敗ノ由テ發スル所以ノ原ハ。胃ト腸トノ官能ノ
衰弱スルニ因リ。又胃ト腸トノ官能ヲ助テ飲食
ヲ消磨製造スルニ必ス需ツ所ノ諸液。其性カシ
失テ無賴不利ノ物ト為ルニ因ルカ為ニ。胃ト腸
トノ官能ヲ強壯ニシ。又其諸液ヲ便良ニ復シテ。
廻テ得タリトスルカ故ナリ。○然レ若シ縱ニ他
ノ諸物ヲ食セシムルニ至テハ。只是レ別種ノ壞
液病ヲ生スルイテ有テ。前記ニ比スルニ更ニ宜カ
ラスト為ルナリ。○治療ノ法其腹ヲ切按シテ之
ヲ診察スルヲ以テ緊要トス。——若シ其腹脹

沒藥 一錢

蘇村謨担母 六分 錢之一

酒石鹽 五分

鹿角霜

高良薑根 各一錢 一種者

薄荷油 三滴

右件茶合シテ散劑トシ。每服兌壳ト銅錢ノ名上ニニ鈔シテ落サルヲ取り。日ニ三四次コレヲ服ス。○若其証大人ニ發スルニ至テハ。須ク其服度ヲ增益シテ之ヲ服スヘシ。

右第百八十四章善飢異嗜胃中ノ酸敗液因ル記治論ス

凡ソ婦人及處女ニ於テハ。月信リシテ循行度ニ應シ。勻調ニシテ次序ヲ失ハサテ使ニイリ要ス。若シ否ルトキハ。毎ニ多ク其顔色蒼黯ニシテ羅ラ旬ニ所謂骨碌碌失斯スコ、ニ處女痛ト云ノ患ヲ發スル者ナリ。昂チ倍ニ所謂阻是ニ於テ常ニ多クハ勝テ紀ス可ラザル常ニ及シタル異嗜ヲ發シ。其望ニ聽從ス可ラザルノ奇品ヲ欲スルニ至ル假令ハ砂礫ノ類。劫灰白堊ノ屬ヲ啖食スルモノナリ。其身經行常リ失テ時ヲ以テ流通發泄セサルニ因テ。始ハ先ツ翁傑達安の意度ト第十章

ナリ。詳ノ証ヲ催シ。漸ク增長スルトキハ。遂ニ進テ
自性ノ壞液病^{第二十一章}ニ變シ。陷ルモノナリ。
○右ノ壞液若シ胃中ニ將來ルトキハ。總テ其穢
シ知覺スルイテ至ルノ器ニ向テ。詭異非常ノ抵
觸感動ヲ與ヘ。輒チ爾ク得テ名狀記載スベカラ
サルノ記ヲ發ス。是ヲ以テ右ノ種類ノ婦女ニ於
テ。右ノ如キ等ノ記ヲ發スルイ。種々一ナラズト
雖モ。須ク皆是ノ門ニ係屬スト知ヘシ。○其發ス
ル所ノ証。多端ニシテ名狀スベカラズト雖モ。其
原ハ則チ一ナルカ故ニ。苟モ其原ヲ察スレハ。復
々其証ニ從テ之ヲ尋子標ヲ認テ却テ眩惑ヲ致

ス。イテ爲サヌ。無用ノ辨ヲ事トスルイテ費サ
ルナリ。何トナレハ。右等ノ病婦患女。壹ニ是皆
ルニ第一十章翁傑達安^{意度}ニ於テ記スル所
ノ一方ヲ以テスレハ。諸般ノ善穢異嗜ヲ區別スル
ヲ須ク知シテ。皆能リ治スルナリ。其要ヲ知ラ
フノ輩。皆証ニ從テ名テ演シ。從ニ其末ヲ述テ其
本ヲ原ルイテ務メス。此ニ説リ所等ヲ其要ヲ知
ラ其弊ヲ矯ニスルニ足ル。古ステ曰ク。其要ヲ知
ル者ハ。一言ニシテ終ル。其要ヲ知ラサル者ハ。流
散シテ窮ナシ。○其中若シ酸敗液ノ微シ的實ニ
ト信ナリ。則チ方ニ終ニ前章ニ記載シタル
得ルイアラハ。○爾後須ク斯ニ從事スベキ所ノ
者ハ。適用便宜ノ藥ニ因テ以テ住行シテ運利

順調ナラシムルニ在リ。

右第百八十五音。善飢異嗜ノ自性ノ變壞因ヲ証治ス。

善飢異嗜ノ証。孕婦ニ發スル者ハ。自餘ノ患人ニ
發スルト。多ク差異ノ往來アルイヲ致シ。斯ニ混
淆スベカラザル一大定徵アリ。如何ナル歟
ニ之ヲ定徵ト謂フ。右ノ孕婦ニ發スル常ニ反シ
タル異味異物ヲ嗜ス。飲食ヲ阻妨シテ惡心ヲ為
シ。及ヒ嘔吐スル等ノ証ハ。皆是レ重身スルノ定
徵ニシテ。其諸証ヲ發スルハ。儼トシテ一病患
ニ異ナラスト雖モ。全然トシテ終ニ其身ノ保安
ニ妨害有イナシ。此其他ニ異ナル所ナリ。○斯ニ

明ニ知ル其已ニ胎ヲ受テ任育スルニ當テハ。其
子宮漸漸ニ盈脹シ且ツ方ニ事ヲ用テ大ニ運動
シ發スルガ為ニ。盈脹運動スルノ勢他ニ加ルニ
地ナリ。必又胃ニ於テ相ヒ迫脅シ。論胥シテ其運
動ヲ連施波及スルイ。一二是レ第百六十九音ニ
論スル所ノ身體ノ運動ニ因テ。胃コレカ為ニ惡心
ヲ發シ。第百七十章ニ論スル所ノ意思ノ運動ニ
テ胃ヲ感盪シ。以テ亦惡心ヲ發スルト同一般ナ
リト知ルヘシ。○是故ニ。斯ノ如キ善飢異嗜ノ証
ニ於テハ。斯ニ從事スルイ。一二右ノ論說スルト
コトニ隨テ之ヲ治スベキナリ。

右第百八十六章善飢異嗜他人感觸因証治論ス

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

噯氣吞酸嘈雜篇第三十一

噯氣吞酸嘈雜ノ病羅旬ニ是リ鎖達ト云。其証ニ
二候アリ。其一ハ是レ心ノ部位或ハ胃ノ上口ノ
傍邊ニ於テ熱シテ火ノ如リナルイリ覺一。夫ヨ
リシテ惡心ナテヒニ噯氣ヲ發セシイリ要スル
ノ意思ヲ催シ。其二ハ噯氣ヲ發シ。其發スルト本
咽中熱ク。其咽中ニ發颯漚越スル所ノ者。或ハ卒
烈酸屬。或ハ苛熱ニシテ燒カ如ク。或ハ味苦ク。喻
スハ猶夫ノ爐眼ヨリシテ炎氣ヲ吐クガゴトク
胃中ニ在ル所ノ油氣脂膏ヨリ。右ノ諸件ヲ發颯
漚越スルノ証アルイリ致スナリ。

右第百八十七章爰氣吞酸嘈雜ノ大較ヲ論ス

其爰氣吞酸嘈雜ヲ將來ル所ノ原復々多ク廣喻
其論スルイテ須タスシテ知ベシ。何シ以テ之リ
言ハ。其初胃中上脘ノ部位ニ於テ熱シテ燒カ
如クナルイテ覺ヘ夫ヨリシテ上ニ浮越シテ咽
中及ヒ口舌ニ熱シテ味苦キイテ發スル者ハ。此
他故ナシ。胃中ニ在ル所ノ液發越湧越シテ迺チ
爾ルイ。前ニ舉ル所ノ如ク。火ノ焚燒シテ鬱攸ヲ
發シ燄氣ヲ吐リノ譬喩。以テ之ヲ尽スニ足レリ。
其原始スル所ヲ求レハ是レ腐敗變壞シテ酷厲
ニ化シタル脂油ヨリシテ發シ。右ノ諸証候ヲ見

スナリ。○其外ニ尚此ノ撰生ノ方ニ因テ亦能ク
此ノ証ノ發スルイテ致ス者アリ。即チ撰生シ善
セス飲食節ナキ者。油膩脂膏ノ食饌ヲ以テ日用
饑ヲ救フノ常供ト為ストキハ。則チ多ク此証ニ
陷ル者ナリ。夫ノ貧窶ノ人ノ如キハ。恒ニ屢空キ
ニ慣ヒ。且ツ穢素ヲ以テ糲ソシキシイカ故ニ未タ嘗
テ此患ニ罹リシイテ苦ミ訴ルイ有イテ聞カズ。
○然レ又其油膩脂膏ヲ常ニ用ヒ多ク食フニ亦
スシテ尚此証ニ及ヒ。右ノ例ニ在ラスシテ其因
異シム可カ如ク然ル者有テ是レ如何シテ爾ル
ト云ニ其因亦猶シ前説リ如シ。特ニ其脂油ノ類

シ取テ各別ニ専用セズト雖モ。凡ソ其飲食ノ甘
脆旨美ニシテ口ニ可ナル者。及ヒ生草用テ以テ
滋養ニ堪タル所ノ食饌ハ。皆其性中自然ニ脂油
ヲ挾齊セル者ナリト云イテ思ハザルノミ。只此
ノ情ヲ知ルトキハ。則チ最モ理會シ易シ。其脂膏
多キノ飲食膳羞。若シ其膽汁及ヒ諸液ノ粘穢ヲ
漂靈シ凝結ヲ滌解スル石鹽ニ似タルノ性カ偶
虧損スルニ値トキハ。常ノ如ク其脂膏ノ粘穢ヲ
漂靈セタルカ故ニ。復タ水液ト相得スシテ。互ニ
相離テ和調セズ。其性ノ水ヨリ輕キヲ以テ。胃ノ
上脘ニ浮越スルナリ。○其和調セスシテ分離シ

タル所ノ脂油相ヒ類聚シテ胃中ニ在テ最モ其
上面ニ浮ヒ。溫暖ノ氣ニ鬱蒸煎熬セラレテ熱ヲ
成シ。且ツ変シテ酷厲苛毒ノ性ト化スルナリ。夫
ヨリシテ胃口ノ最上開啓セルノ處ニ底著シ。上
ノ數處ニ説リ所ノ諸証候ヲ發スルナリ。○其物
ノ在ル所。昂チ其厭ヒ惡ムヘキノ侵刺抵觸ヲ為
カ故ニ。遂ニ胃ノ運動ヲシテ平素ノ如クナラス
次序ヲ錯乱セシム。是ノ時ニ當テ昂チ第百六十
七章ニ論スル所ノ惡心ヲ覺ルナリ。○右ニ論ス
ルカ如リ。腐敗變壞スルイ。胃中ノ諸液ヨリシテ
之ヲ發スルカ為ニ。箇ノ風氣ヲ生スルモノナリ。

其風氣素ヨリ輕清ナルノ質ニ因テ。胃中ニ在テ
下ヨリシテ沸騰上泄スルノ勢。其脂油ノ相ヒ聚
テ食道ノ間哆セ。ル處ニ在ル者ヲ。上騰ノ際ニ臨
テ。相^ヒ激盪牽牽シ。以テ咽門ニ至リ。口中ニ出
ルナリ。故ニ其徑ル所ノ處。咽ニハ其熱シテ燒カ
如クナルイテ覺ヘ。口舌ニハ其苦シテ臭穢ナル
ノ味ヲ為スナリ。○夫レ火ノ燄ノ吐ク所以ノ者
ハ。膏油アツテ之カ本質ヲ為スリ以テナリ。故ニ
能ク鬱攸シ發シテ焚燒ス。此記シ發スル所以ノ
者モ。亦猶斯ノゴトシ。胃中ニ脂油有テ。上ニ熱氣
シ發揚スルノ致ス所ノ也。○其飲食シタル脂油

ノ是ノ原トナルノ。ニアラス。腐敗變壞シテ脂
油ニ堪ザルノ汁液。亦能ク其ニ此ノ諸記ヲ發ス
ル者ナリト知ヘシ。○其腐敗變壞セル油氣多キ
ノ証ヲ將來ル所以ノ者ハ。其原多ク油膩脂膏ノ
飲食ヲ用ルイテ為シテ。膽汁ニ災スルノ因ヨリ
便捷ナルハナシ。此其油膩脂膏ヲ飲食スルイ多
カ故ニ。膽汁ヲシテ十分ニ物ヲ澡雪スルイ石鹼
ノ如クナルイ能ハザラシハレハナリ。又ハ胃中
ニ醋屬ナル酸敗液ノ生スルモ。亦其膽汁ノ名酸
ノ如クナル性ヲ奪フ者ナリ。然ル時ハ。必ス胃中
ニ於テ水氣ト油氣ト相ヒ和調スルイテ障礙

其標生一二飲食ヲ節ニシ。其脂油ヲ禁止スルノ
過刻ナル程ニシ。然シテ暫ノ間次ニ出ヌ所ノ散
劑ヲ用ユヘシ。

噯氣吞酸嘈雜ヲ治スル散劑方

鹿角霜 二錢

沒藥

酒石鹽

各一錢

右件藥合シテ散劑トシ。十六ニ分ケ。其一分ヲ
取テ。之ヲ服スルノ日ニ四次。

若シ其毒多クシテ。熱シテ燒カ如リナルノ証甚
キ者ニ於テハ。次ニ拳ル所ノ方ヲ用ヘシ。

方

沒藥 一錢

酒石 三錢

右件藥合シテ散劑トシ。之ヲ用ルノ前方ノ如
ク。

次ニ載ル所ノ方ヲ以テ。匙將水ヲ用ルガ如リ常服
ニ供スルニ。前証ヲ治スルノ亦甚タ良ナリ。

噯氣吞酸嘈雜ヲ治スル散劑方

大麥水 四十八錢

香椽汁 八錢

酒石鹽 一錢

右件茶合シテ調勻シ聽用ス

此証大率必ス粉錫及ヒ蝟蝟石ヲ用ユ。以テ胃中ノ酸敗液ヲ攻治シテ之ヲ制伏スルニ取ル。今用ザル所以ノ者ハ余コレヲ知ラザルニ非ス。亦常ニ用テ其効ナキヲ知レハナリ。其効ナキ所以ノ者ハ斯ニ至トシテ須ク所ノ此証ニ用テ利益アル能ク油膩脂膏ヲ和調スル石礮ノ如キ性アルナキカ為ナリ。

右第百九十章 噯氣吞酸嘈雜ノ治法ヲ論ス

心腹痛篇第三十二

心腹痛ハ羅旬ニ之ヲ伽カ爾ル若兒ル如亞ヤト謂フ。夫レ胃ノ最上関岐シタルノ部ヨリ。食道ノ終竟トニ至ルノ處。尽リ神經有テ茲ニ布護ス。故ニ能ク重キ痛ヲ催ス。イシ為ス。即チコレ胸骨ノ内ト腹ノ上邊中行ニ於テ。一奇ニ其痛ヲ覺ルナリ。○其痛素ヨリ心ニ在ルニアラス。全ク然リ胃管ニ於テ之ヲ作スト雖モ。今際ニテ之ヲ辨シテ心腹痛ト稱スルナリ。

右第百九十一章 心腹痛大較ヲ論ス

此証固ヨリ能ク知易シ。然レ氏毎ニ多ク治スルニ

難シトナ。其常ニ痛ノ由テ来ル所ノ原因ヲ確知
スルイ能ハサルノ致ス所ナリ。其痛ヲ作ス外
証同キカ如シト。雖モ因縁シ来ル所ノ内原ハ尽
ク諸般ノ各異ナルイ有カ為ニ。毎ニ多ク寒熱相
及シ性効各異ナル某方ニテ。各其治ヲ得ルナリ。
○夫レ是ノ如シ。故ニ此ノ一種ニ用テ以テ効驗
ヲ収タル方。移シテ諸リ彼ノ一証ニ施スニ徒ニ
効驗ナキノイナラズ。適ニ以テ其劇ヲ益シ。患人
ヲシテ生地ヲ離テ危途ニ致サシハルニ足ル。○
是ヲ以テ予其一二ノ較著ナル者ヲ援リシテ。茲
ニ之ヲ示ントス。

右第百九十二章心腹痛ノ病因ヲ論ス

諸般ノ毒物及ヒ酷厲峻劇ノ毒劑ヲ啖服呑嚥シ。
明白ニ是レ因テ以テ箇ノ重キ痛ヲ心腹ニ發ス
ルニ於テハ。宜ク其毒物ヲ出シ除クヘシ。許多ノ
平和ナル諸液ニ油氣アル者ヲ加ヘ調シテ之ヲ
飲シメ。以テ其酷厲峻劇ナル者ヲ包摂シテ。其ヲ
シテ嘔シ出スニ容易ナラシムベキナリ。○若シ
右ノ如リスレバ。其吐催サハル者ハ。第十五章ニ
出ル所ノ吐方ヲ用テ。其吐ヲ誘シ迎ルヲ以テ。必
ス闕リ可ラザルノ緊要トス。○其痛ノ多ク飲食
シタルニ因テ作ル者ハ。若シ自ラ吐ヲ催スナク

クハ。須ク其咽ヲ探テ以テ迎ヘ吐スルヲ妙トス
○外ヨリ飲食シタル者ノ因ニ非スシテ。又其内
因ノ胃ニ在ル者アリ。必辨セズハアル可ラス其
痛飲食スルニ隨テ昂昇テ發シ來ル者ハ。即是レ
飲食ニ因テ發スル者ニシテ。上ニ説リ所ノ如シ。
其治モ上ニ説リ所ニ從テ術ヲ施スヘシ。若シ又
胃ノ罪ニ發スル者ニ至テハ。則其コレヲ吐セシメ
及ヒ吐業ヲ施ス。却テ其失ニ致スナリ。○其飲
食スル所。及異偏勝ノ品ニ非スシテ恒ニ放ルニ
猶尚飲食スル毎ニ例シテ痛ヲ催ス者ハ。明ケシ
是レ胃ノ罪ニシテ飲食ノ罪ニ非ス。其因コレヲ別

ニ胃ニ於テ求ハベキ。且其痛吐後モ亦治セズ。
吐藥ヲ施シテモ亦差ザル者ナリ。

右第百九十三章心腹痛ノ飲食ニ因テ証治ヲ論ス

毎ニ多ク甚ク辨識スルニ難キハ。心腹痛ノ來ル
一ノ飲食スルノ無シテ發スル者タリ。此其發ス
ルノ胃中ニ在ル所ノ液若クハ蟲ニ因リ。然シテ
其液若クハ蟲能ク泄除スベキ者ニシテ宜ク驅
除ノ法ニ從フベキカ。抑又右ノ因ニ殊異ニシテ
胃ノ自ラ為ス所ニ係リ若クハ諸液ノ致ス所ナ
リト雖モ。其所在胃中ニ於セズシテ胃ノ近傍ニ
在ルカ。是ノ如キ者ハ復タ泄除スルニ縁ナリシ

テ。探吐及ヒ茶以テ湧發スルノ。適ニ以テ之ヲ停
スルニ足レリト云コレヲ覈實ニスルノ極テ為シ
難シトス。○是故ニ。斯ニ從事スルノ幾多ノ懇切
ヲ致シ精密ヲ盡サ、ルノ得ス。居恒ニ盡リ其
肯綮ニ中ルイリ得ズシテ。其患ヲ遺スノ有モノ
ナリ。吾輩寧實正當ノ處治ヲ擬議スルニ於テ。每
ニ其戒慎シテ其弊ヲ取ラザランイリ要スル者。
一二斯ニ在ルノ。○先時ヨリ撰養次序ナクシ
テ此証ニ至ル者ハ。多クハ。噯氣ニ乘シテ壞液ヲ
出スノ患ヒ其痛胃ノ始テ空虛ナルノ時ニ方
テ發シ。並ニ胃中ヨリ酸屬ニシテ腐敗セル毒ヲ

吐キ除クニ因テハ。啗ニ其痛ノ輕安ナルイリ覺
ルノ之ナラス夫ヨリシテ亦暫ノ間ハ痛差テ日
ヲ経ルニ至ル。此証ノ如キハ。則チ余其胃中ニ物
有テ以テ是ノ痛ヲ催スト云イリ辨ス。○此証ニ
臨テ宜リ施用スベキハ。吐劑ヲ用テ以テ其惡物
ヲ除却シ。然シテ後第二章ニ出ス健胃ノ劑ニ
因テ。以テ其新ニ生スルイリ防禦スベキナリ。其
禁スル所ノ者ハ。豪食及ヒ消化シ難キノ物。若ク
ハ多飲シテ胃ヲシテ充滿セシムルノ。皆宜カラ
サル所ナリ。

右第百九十四章心腹痛胃中酸屬液因ル証治論ス

公翁^{シト}私^ス多^キ金^キ屈^グ羅斯^{ロリス}糜爛膿壞或ハ自餘ノ諸症其
胃膜ニ延及スルニ因テ痛ヲ催スニ値ハ、隨テ
昂チ須リ諸ノ吐劑及ヒ胃ノ運營シ發動スルノ
弟ヲ癘奪スヘシ。何トナレハ右ノ諸因ヨリ發ス
ルノ心腹痛ハ右ノ諸劑ヲ得テ營ニ治セザルノ
ミナラス。祇ニ以テ其痛ヲ增益スルニ足レリ。甚
ケレハ殆ト救ハレサルニ至ルナリ。○此ノ一種
ノ心腹痛ニ至ラハ連綿シテ絶サルノ痛アル者
ナリ。其胃空虚ナルノ時モ滿實ナルノ時モ痛休
止スルノ期アル一無シ。然レ一旦ニシテ頓ニ之

シ充盈セシムル時ハ其痛更ニ一層ノ劇ヲ増ス
ナリ。○若シ其人吐セントメ勉强攪擾スルトキ
ハ痛大ニ發起シ甚キハ昏冒シテ人事ヲ省セサ
ルニ至ル者大抵爾リトス。此其胃ニ痛アル時ノ
常態ニシテ他ノ諸部ノ痛ニ殊異ナル所以ナリ。
○余茲ニ更ニ其証候ヲ舉示スル一能ハス。只宜リ
余カ著ス所ノ瘍科精選ニ詳ニスルノ諸徵並ニ
治法ニ從テ其胃ニ事アルノ証治ヲ得テ酌切充
當ニ期シテ以テ斯ニ從事スベキナリ。○余茲ニ
輒チ之ヲ說サル所以ノ者ハ時ニ是ノ處ニ於テ
人ヲシテ其醫タル者ハ總テ須リ其事ヲ精勉シ

幾多ノ周急懇到シ盡シ。病ニ臨ミ証ヲ診シテ。藥劑ノ當不ヲ辨シ。治術ノ操設シ處スルイ。必ス小心仔細ニシ敵テ。鹵莽ニスルイ勿ク。苟且ツ以テ斯ニ從事スルイ。尤モ宜ク戒慎スベキ所ナルイ。知ラシメンイシ要ス。廻テ是ノ心腹痛ニ於ルモ。假令へ人皆某ノ方解リ是ニ於テ効驗ヲ得タリト曰ト雖モ。雜然トシテ其言ニ耳食シ。妄ニ從テ之ヲ施用スルイ無ルベキナリ。

右第百九十五章心腹痛胃膜諸患因証治論又此心腹痛ヲ發スルノ原。右ニ歷舉スル諸因ノ外。尚其揣摩探索シ候テ然シテ後得テ知ルベキ者

毎ニ多シ。今其中ニ就テ一二ノ例ヲ掲テ以テ之ヲ示ントス。○自然ニ及スルノ運動及ヒ熱毒共ニ能ク胃管ニ轉送シテ。毎々多ク胸骨内。心ノ部位等ニ直テ。耐忍スヘカラザルノ劇痛ヲ發起スル者ナリ。此証ニ至テハ。廻テ熱有テ共ニ發作減止ス。其痛。施術百方スレモ。毫モ効シ奏スルイナシ。尋常ノ如ク吐劑ヲ用エト雖モ亦治セズ。此証ニ臨テハ。只是レ第七章ヨリ第十三章ニ至ルマテニ記載セル所ノ。治熱ノ法方モテ斯ニ從事スベキナリ。此其熱病ニ從テ生スル傍証ナルカ故ニ。能ク其藥ヲ用ルイテ為スト雖モ元其本原ノ

治スルノ主劑ナルニ因テ。其痛ノ發作ヲシテ即
應シテ治セシムルイツ保スルイ能ハス。然シテ
毎ニ多ク嘔吐セント欲シテ勉強攪擾スルイ有
カ故ニ其茶ヲ与ルイ。宜リ稍々ニ与ヘ服セシム
ヘシ。且ツ之ニ加調スルニ治熱ノ章ニ記載セル
字達^{ラウダ}担^{ウハ}謨^ハ律^リ規^イ需^ジ謨^ハアルヒハ白^ハ嬰^ハ粟^ハノ舍利^ハ別^ハ少
許^ハヲ以^シシ。胃ノ運動ノ攪擾ヲ靜止スベキナリ。○
爰ニ又非常ノ劇痛ヲ催スルイアリ。即チ第百十三
章ニ出ス所ノ易^カ郎^ム布^テ的^ト列^ヒ金^キ偶^クノ胃管ノ細筋^ハ織
條ニ患ヲ為セルニ因テ發スル者タリ。是ヲ以テ
婦人及ヒ稟^ハ性^ハ虛^ハ弱^ハノ人此患ニ嬰ルトキハ久ク

經テ治セサル者ナリ。此証能リ連綿シテ遂ニ胃
ヲシテ此ニ少ク飲食ト雖モ之ヲ容納スルニ耐サ
ラシムルニ進ムイツ為ス。藥物ニ至テハ平和ノ
品味ト雖モ一匙ヲ服スルイ能ハス。一二ノ熱茶
ニ至テハ更ニ甚シ。○此ノ一種コレヲ察スルノ法。
第百十三章ニ論スル所ノ此証ニ例シテ發スル
所ノ諸徵候ニ因テ知ヘシ。其中多クハ第百十八
章ニ論スル神經ノ細筋織條感動シ易キ運動ニ
原テ發スルモノナリ。^{第百六章ノ註ヲ參考スルハ}
^{發スル勿以ニ}○治法常トシテ是病ニ習ヒ用ル
所ノ諸方法ニ從テ之ヲ取り施スト雖モ但其極

テ戒慎シテ仔細ニ從事スベキハ。每服少許ヲ取
テ頻々ニ与フヘシ。即チ平常用ル所ノ服量シ四
分シテ。其一分ヲ以テ。毎二一刻許シ間テ、服セ
シムルヲ訖トス。以テ其痛ノ差ルニ至ラ度トス。
夫然シテ後其昌郎布^カ的列^カ金^カ屈^カシ治ス例依テ海寄
用ルニ至ルヘシ。○心腹痛ノ第三十七章ニ論ス
ル聖^シ京^キ健^ケ傷^ケ即^ケ子^ケ胃^ケ寒^ケ 第四十六章ニ論スル伊^イ屈^ク多^ト
第五十章ニ論スル諸氣及ヒ自餘^ジ丸^ワノ疼痛ヲ發
スル諸般ノ疾ニ因テ來ル者ニ至ラモ。亦皆右ニ
拳^{ケン}ル所ノ二件ノ例ニ效テ。觸類隅反シテ斯ニ從
事スヘキナリ。其^シ尽^シリ之^シヲ歷舉該列スルノ事繁

凡ニ涉ルカ爲ニ爰ニ之ヲ贅セザルナリ
右第百九十六章心腹痛ノ熱毒及ヒ昌郎布^カ的^カ列^カ
金^{キン}屈^ク自餘^ジ諸病^シ因^レル^ル治^シ論^ス

凡ニ涉ルカ爲ニ爰ニ之ヲ贅セザルナリ
右第百九十六章心腹痛ノ熱毒及ヒ昌郎布^カ的^カ列^カ
金^{キン}屈^ク自餘^ジ諸病^シ因^レル^ル治^シ論^ス

發渴篇第三十三

夫レ食ヲ欲スル一箇ノ意思ハ。天資ノ常然ニ出
テ。百般計較シテ。以テ其口腹ニ充ンイテ當求シ。
自ラ其身ヲ滋毓保養スルイテ致ス。其飲ヲ求
ル一箇ノ意思ニ至テモ。亦猶斯ノゴトシ。以テ其
水液ヲ引テ其身ニ灌溉浸潤スルガ為ニ。其一方
ニ排對シテ。食欲ニ相偶スルナリ。○右ノ如ク飲
ト食トノ兩欲ハ。天性ニ出レハ。自ラ饑シテハ食
ヲ甘シ。渴シテハ飲ヲ為シ易キが上ニ。之ヲ和ス
ルニ五味辛甘ヲ以テシ。愈^イ製造シテ愈^イ口ニ適ス
ルカ故ニ。若^イ是ノ二ノ者ヲ嗜好シテ。焉ニ存セ

ガルイ無キ意ニ愛スベキ大欲ト成ルイテ致ス。
迺^イ其性命身體ヲ畜養スルノ以テ闕ク可ラザ
ル一急務タリト云ニ論ナシ。其生リ愛シ死ヲ惡
シ。動靜云為。百爾ノ伎倆。只此等ノ欲ヲ遂ルシ以
テ樂トシ。終焉ノ志願。復々他ニ求ルイテ復スシ
テ足レリトスルニ至ル者。此ノ欲与テ一ニ居ル
ノミ。○平常ノ渴ニ於テハ。毫モ論辨ヲ容ル。所
ナシ。其疾病ニ在テ發渴スルイ。饑ト渴ト其情ヲ
異ニスル。互^イ背相反セル條件ヲ言フニ。諸病ニ於
テ食ヲ思フノ欲ヲ失フ者ハ屢コルアリ。然レ飲
ヲ引クノ機ヲ失テ。飲ム^イ能ハザルニ至ル者ハ。

鮮矣ナリナシ而シテ却テ大渴引飲ノ証ヲ發スル者。往々ニシテコレ有レド。大食ヲ為スノ証ヲ見ス者。ニ至テハ殆ト稀ナリ。是レ相及スルニ非スヤ。○渴証ノ僅ニ發スル者ハ。平常通シテ有ルトコロ。殊異ナルト無キカ故ニ。爰ニ今只其疾ニ因テ大渴ヲ發スル証ノミヲ舉テ之ヲ示ントス。

右第百九十七章發渴ノ大較ヲ論ス

元來コノ渴ヲ發スル所以ノ者ハ。天性自然ニ水液津潤ノ身体中ニ匱乏スルヲ告訴スルカ為ナリ。是ヲ以テ其發スルト。皆其多ク蒸氣ヲ發シ。或ハ多ク汗ヲ發シ。或ハ多ク小便ヲ利シ。或ハ多ク

ク水瀆泄瀉。或ハ多ク動作勞碌シタルノ人。若クハ大熱乾燥ノ諸熱証等ニ於テスル者ナリ。○其中ニ就テ惡微ト為スヘキ者ハ。只右ノ如キノ諸熱ニ於テ。渴スルトコト奪失スルノ一証是ナリ。此患人其勢必ス發渴スヘキニ。却テ然ラサルモノハ。其中元來津液涸竭シテ乾燥スト雖モ。天性自然ニ之ヲ告訴スルノ機已ニ荒廢スルガ為ナリ。是ヲ以テ其レ重シトス。○右ニ歷舉スル所ノ諸因ヨリシテ發スルノ渴。皆宜ク水液ヲ与フベシ。其渴因ヲ以テ差ルトシ得ルナリ。其中意ヲ用テ斯ニ從事スベキハ。第一ニ冷飲セシムベカラ

ス。若シ是ヲ犯セハ。其熱セル体中ハ暴熱ニシテ
寒冷ヲ投スルガ故ニ。疑位シテ濃厚スルイヲ致
シ。得テ渙發解蔽スベカラサルニ至ルカ為ナリ。
ニツニハ。是ヲ飲シムルイ。宜リ稍々ニ与フベシ。
毎服少許頻々ニスルヲ佳ナリトス。以テ胃中ニ
盈滯セザラシメンイヲ要ス。其益ナク且ツ病ヲ
シテ重難ナラシムルカ為ナリ。第十二章亦此說
アリ備考ヘシ
○人若シ豫メ右ノ義ヲ知ルイ有テ。其飲ヲ求ル
ノ際ニ當テ。嚴ニ之ヲ防戒シテ。法ノ如クスルイ
アラハ。則テ必ス我ヲシテ彼ノ忌憚スルイ無リ。
者待法ヲ守テザル者ト。其見証自ラ異ナル者ア

ルイヲ辨別スルニ足ラシメン。
右第百九十八章發渴ノ水液竭涸ニ因ル証治論

諸水氣腫滿ノ証ニ於テハ。毎ニ多ク大渴過度ノ
証ヲ發スル者ナリ。○其証ニニ分ツ。一ハ是レ水
氣甚クシテ。支體ノ空虧ナル諸部所謂脂肪胞
ニ編第七十五章自然ノ空有テ。發出ノ蒸氣ヲ含有シ。又
脂肪胞ナルモ。アリ。中ニ充塞シテ。血ノ一身ニ
周流スルノ道路ヲシテ阻闔セシムルニ因テ。血
中ヨリ分利シ出ス所ノ諸部ノ水液ヲシテ多渴
セシメ。遂ニ以テ此ノ渴証ヲ發スルナリ。此証ニ

臨テハ治法復前章ニ講明スルカ如ク。水液ヲ飲
シムルヲ以テ治セシムル一能ハス。其助テ水氣
ヲ増スカ為ナリ。只宜リ屢其口ニ灌潤スルニ水
液及ヒ烈應設酒或ハ香椽汁ヲ以テスベキナリ。
○其二ハ水氣始テ腐壞スルニ方テ此証ヲ發ス
ル一アリ。之ヲ察スル一。其傍ヒ來ル所ノ諸証ニ
於テ。心腹燒ガ如リナル一ヲ覺ヘ。且ツ發熱シ。食
ヲ惡テ嘔逆シ。及ヒ患人憤悶煩重シテ。從事ニ難
キノ候アルヲ以テ之ヲ知ル。○此証ニ臨テハ。亦
能ク多ク水飲シテ可ナルガ如ク見ユル也。其
之ニ与ルク水腫ヲ増ガ為ニ。之ヲ防テ飲シメザ

ルナリ。○是故ニ。此証モ亦前ニ奉ル所ノ法ニ從
テ。口ニ灌シテ僅ニ其渴ヲ霽潤スベキノ也。即チ
覆盆子或ハ桑葚或ハ結ル私ス諸本索チ古リ賴子。西洋
其性冷ニシテ。清熱潤燥。解煩止渴等ノ功アリ。彼
土多ク蜜藏シ用ユ。第三章二十五章ニ出ル。是設ル。拂
即是物。等ノ儼烈易ニシテ。甚々使用スル地多ク。第十五章ノ儼烈易
同シ。ヲ用ベシ。若リハ砂糖モ
テ醃藏シタル香椽ヲ取テ。毎ニ一片ヲ用テ可ナ
リ。然シテ第二十五章並ニ第二十六章ニ載ル所
ノ壞液ノ治スルノ方法ヲ用ヘシ。其之ヲ用ル一
甚々儼齋スルガ侶リ毎ニ至少ニ宜シキナリ。
右第百九十九章發渴ノ水腫及ヒ水氣腐敗ニ因

能リ飲ハト雖モ。其ツシテ嗜欲ニ應シ口ニ適セ
シハルイヲ為スハ能ハズ。此其壞液ノ存リ食ヲ
惡テ嘔シ。及ヒ惡心ノ証ヲ催スガ為ナリ。○若シ
其第二十五章ニ載ル熱壞液ニ因テ生スル者ハ
即其處ニ見ス所ノ清涼飲ヲ飲シムヘシ。又ハ巴
旦杏乳ヲ造テ之ヲ用シハヘシ。

巴旦杏乳ヲ造ル法

煮大麥水ヲ以テ臼中ニ傾ケ。更ニ巴旦杏仁數顆
ヲ取テ。同リ其中ニ入レテ之ヲ熟シ研シ白汁ヲ
成スリ候テ。加ルニ少シノ香櫞汁ヲ以テシ。又
之ニ加調スルニ砂糖少許ヲ以ス。

又ハ再ニ蒸過セル蒸餅一枚若リハ三枚ヲ取テ。
水煮シテ漉過シ。加ルニ覆盆子ノ昆コシ設セ爾ル拂ハ少許
ヲ以シ。或ハ和スルニ純精ナル答タ末マ林度リン少許ヲ
以シ。若リハ調スルニ烈レ應セ設セ酒少許ヲ以シテ。与
ヘ服セシムルモ亦可ナリ。○此ニ許多ノ法方便
良ニシテ施用スベキ者ヲ陳列ス。須リ此中ニ於
テ高量シ。宜ニ隨テ諸般ノ和調ヲ為スベシ。此其
飲ヲメ口ニ適シ好ニ當ラシメサレバ。之ヲ与フ
ト雖モ尽リ之ヲ拒ミ吐シテ受サルカ故ニ。嘗チ求
シテ其嗜好ヲ達ハルハイハ甚シタ難シトスルカ為ナリ。
○第二十六章ノ寒壞液ニ於テモ。亦右ニ同リ。其

從事シ難キイ少モ熱壞液ヨリシテ發スルニ減
スルイナシ。亦其饒多ニ水飲シ用ルニ因テ其渴
ヲ靜止スルノ痛ニ不利ナルカ為ニ須クシハ
其口ニ灌シテ之ヲ救ヘシ。諸ク水飲ヲ用ルニ比
スルニ殊ニ優レリトス。是故ニ若シ其寒壞液並
ニ膿壞液ヨリシテ此渴ヲ催スノ証ニ値ハハ。右
ニ説ク所ノ法ニ依テ斯ニ從事シ。其間第二十六
章及第二十七章寒膿ニ壞液ニ於テ記載シタル
方劑ヲ用ユヘキナリ。

右第二百一章發渴ノ壞液因ルヲ記治ヲ論ス

西說内科撰要卷十二終





